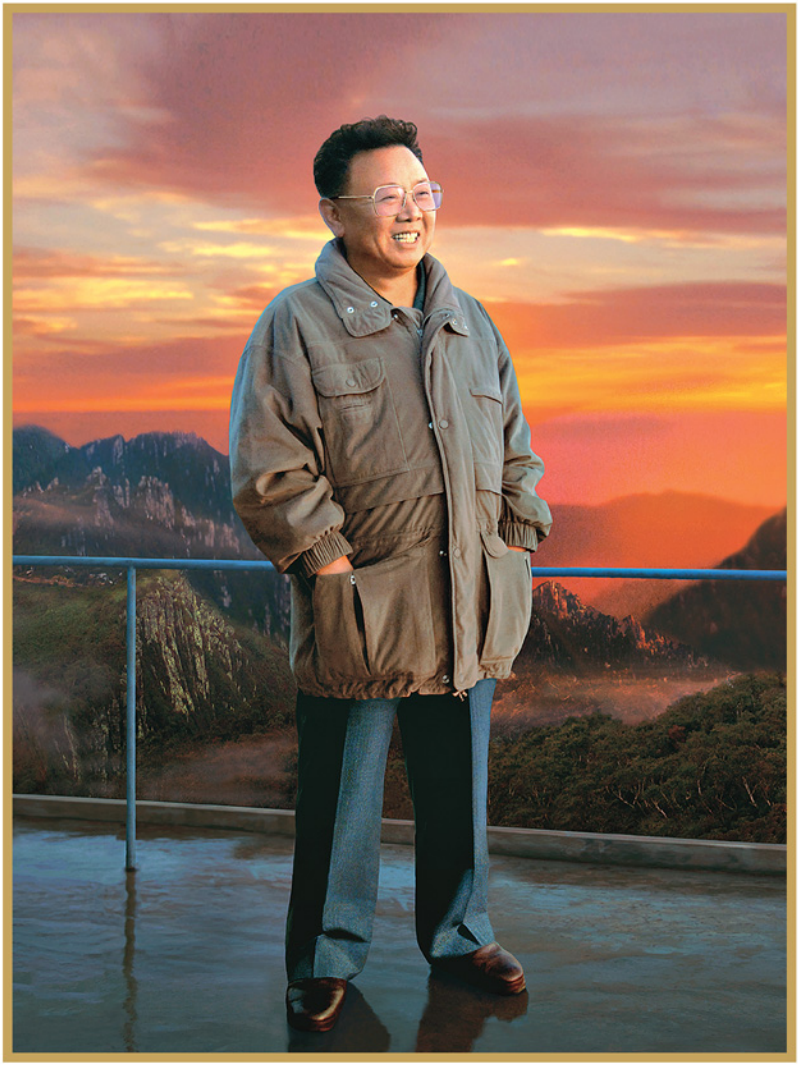
金正日逸話集

1

金正日逸話集

1

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ101（2012）



白頭山密営にある金正日総書記の生家

金日成総合大学時代の金正日総書記

検徳鉱山を訪ね、インクラインで切羽に向かう（1975.7）

愛国烈士陵を見て回る（1998.9）

愛国烈士陵の大門

智恵山にある金日成主席の現地指導標識碑の前で深い敬意を表する（1997.4）

朝鮮人民軍板門店代表部を視察する（1996.11）

大徳山の軍営を視察する（1996.3）

北南首脳会談のために平壌を訪れた金大中
大統領と握手を交わす（2000.6）

鄧穎超・中国人民政治協商会議全国委員会主席と
挨拶を交わす（1983.6）

レーニン廟に花輪を献じる（2001.8）

ハバロフスク市の正教寺院を見て回る

プーチン・ロシア連邦大統領が贈った純粋種の
オルロフ馬を見る（2003.2）

オルブライト米国務長官に会う（2000.10）

はじめに

世界の多くの人々が金正日（キムジョンイル）総書記に敬意を表している。

総書記は自主時代の偉大な指導理念であるチュチェ思想、先軍思想を総合・体系化し、深化、発展させた思想家・理論家であった。総書記によって人間の運命開拓と、国と民族の富強発展、人類の美しい未来を建設するうえで提起される理論的・実践的諸問題に完璧な解答がなされた。

総書記は、非凡な指導力によって朝鮮を世界政治史にいまだ見られなかった一心団結の国、いかなる帝国主義の大敵もあえて侵すことのできない不抜の社会主義のとりでに打ち固めた。今朝鮮には国力が強くすべてが栄え、人民が豊かに暮らす社会主義強盛・繁栄の大門が開かれている。

総書記の人間愛と気高い徳義、他の追随を許さない英知と非凡な見識、鉄の信念と意志、無比の胆力と気骨は万人を感動させている。

実に金正日総書記の70星霜の節々には、非凡な偉人の伝説のようなエピソードがつづられている。

その数多い逸話の中から一部を収録することにした。

目　　次

1　神　秘 …… 1

天の祝福 …… 1
42と白頭山 …… 2
白頭山は主人を見分ける …… 3
板門店の霧 …… 4
「不思議なことだ」 …… 5
天気も偉人を見分ける …… 6
陽光を抱いて歩く人 …… 8

2　英　知 …… 9

総書記に聞く …… 9
世紀を越えて持ち越されてきた矛盾点 …… 10
チュチェ哲学と人間哲学 …… 11
生け捕ったカモメ …… 13
一目で見分けた鶏 …… 15
3カ国語でうたった歌 …… 16
新しい叢書形式 …… 17
フォルテを探せ …… 19
明哲な予言 …… 20
どんな将軍が名将なのか …… 22
メーデーに対する新たな理解 …… 24

独特な文章作法 …… 25
ロシア正教寺院の鐘の音 …… 27
太陽と朝焼け …… 28
無限大 …… 30
なぞなぞ …… 31
科学者たちの感嘆 …… 32

3　献　身 …… 34

雷鳴がとどろいても …… 34
茂浦の釣り場 …… 35
立体的な思索 …… 37
ある幹部の疑問 …… 38
千丈地下の切羽にも …… 40
妙香山の登山コース開拓 …… 41
五聖山の151曲がり …… 43
雪だるまになった車 …… 45
忘れえない「滝あび」場 …… 46
東に西に縦横無尽 …… 48
数えてみた列車の本数 …… 49
列車と家 …… 51

4　愛 …… 53

潮干狩りをしていた少女 …… 53
3人の炭鉱労働者のために …… 54
救われた三つ子 …… 56

兵士の防寒衣 …… 58
慈愛のライト …… 59
わたしの息子、娘 …… 60
労働者の世の中 …… 61
労働者たちに謝れ …… 62
消えた汽笛の音 …… 63
ママのきれいな顔 …… 65
3・8国際婦人デーの「ポムヒャンギ」 …… 67
生まれる前につけられた名前 …… 69
残された空白 …… 71
愛は障壁を越えて …… 73
「セッピョル」 …… 74
よみがえった『乙女の春』 …… 75

5　道　義 …… 77

尊敬する教師 …… 77
手術に立ち会う …… 78
豪雨をついて …… 80
烈士たちを忘れてはならない …… 83
帰ってきた人たち …… 85
変わらぬ姿勢 …… 87
永遠に高く仰ぐ …… 89
最前線で表した敬意 …… 90
活動家を泣かせる …… 91
ウラジーミル・Ｉ・レーニンに …… 92

6　謙　虚 …… 96
ワタの花 …… 96
花模様の座布団と針のむしろ …… 98
人民の息子 …… 99
一番つらい時 …… 100
順番を待つ …… 102
一般車の乗客 …… 104
「特使」の失望 …… 107
3年目に公布された政令 …… 109

7　意　志 …… 111
2本のチョウセンゴヨウ …… 111
愛するもの、憎悪するもの …… 112
あの日の宣言 …… 114
朝鮮よ　その名を輝かさん …… 115
文人か武人か …… 116
高く掲げよう赤旗を …… 118
血の涙の年を送り …… 119
永遠なる主席 …… 120
「戦争の神」 …… 122
巨木と根 …… 123

8　胆　力 …… 126
力強い拳 …… 126
プエブロ号は返さない …… 127

勇士たちを表彰しよう …… 128
戦争と音楽 …… 130
海に伸びたベルトコンベヤー …… 131
空前絶後のサッカー競技 …… 134
収録できなかった航路 …… 135
最高司令官命令 …… 137
空言は吐かない …… 139
「光明星2」号の打ち上げ …… 141

9　魅　惑 …… 143

金正日花 …… 143
スカルノの感服 …… 144
鄧穎超の涙 …… 146
ヤゾフの驚嘆 …… 148
金大中の吐露 …… 150
オルブライトのブローチ …… 151
プーチンの贈り物 …… 153

1　神　秘

天の祝福

金正日総書記は朝鮮が日本の軍事的占領下にあった当時、金日成(キムイルソン)主席が指導した抗日武装闘争の拠点だった白頭(ペクトウ)山で誕生した。

それは1942年2月16日だった。

気象学者がおよそ100年前から記録した白頭山地区の気象観測データによると、その日の天候は実に天の配剤としか考えられないほど奇異で神秘的な日和だった。

データによれば、朝鮮で一番高い白頭山地区は毎年2月中旬になると、気温が零下40度を上下し、激しい吹雪が吹き荒れる。

その年の2月15日も例外ではなかった。

ところが、夜になって北西風が次第に弱まり、2月16日の夜明けにはそれも静まり、気温も最低零下29度から零下18度に上がった。

明るい太陽、透明な大気、まったく晴れやかな日和だった。

天も総書記の誕生を祝福しているかのようだった。

42と白頭山

金正日総書記が誕生した白頭山は北緯42度の線上に位置している。総書記が誕生した1942年と一致する数字である。

偶然だというには白頭山はあまりにも意味深いいわれを秘めている。

朝鮮で一番高い白頭山（2750メートル）は年中銀雪をまとい荘厳にそびえ、昔から朝鮮民族の祖宗の山と呼ばれてきた。総書記が誕生した当時、白頭山には日本の軍事的占領（1905～1945）から朝鮮を解放するための武装闘争を繰り広げていた金日成主席の導く朝鮮人民革命軍の司令部があった。

総書記は抗日大戦の銃声を子守歌のように聴きながら育った。総書記の目に初めてなじんだのは軍服を着た母の姿であり、総書記の「幼なじみ」は砲煙にくすんだ闘士たちだった。総書記にとって険峻な白頭霊峰は生まれ故郷の庭にひとしかった。

人は生まれた土地に倣（なら）うと言うが、総書記も不思議なほど白頭山に倣っている。山頂に巨大な天池を抱き、あまたの山岳を率いた荘厳な姿と神秘的な自然現象によって人々を魅惑する白頭山は、そのまま雄大な抱負と非凡な英知、ゆるぎない胆力と強靭な意志、限りない包容力と完璧な統率力を備えた総書記の風格と気性を象徴している。

白頭山は主人を見分ける

金正日総書記が白頭山に登った時のことである。

その日は陰うつな空模様だった。吹雪が視界を遮り、荒れ狂う風がたちまち雪の吹きだまりをつくり行く手を阻んだ。

こんな日は登頂するのが難しいうえに、登頂したとしてもすばらしい景色は見られませんと言って、随員たちは総書記を引き止めた。

しかし総書記は、かつて抗日革命闘士たちはこういう道を歩んだのだ、これが本当の白頭山踏査だと言って、先頭に立って進んだ。

一行はついに頂上をきわめた。

総書記は両手を腰に当て、中天から吹き降ろす吹雪を眺めた。

この時、不思議なことに天池から突如キーンと氷板が割れるような轟音(ごうおん)が響き渡り、吹きすさんでいた吹雪が一瞬鳴りをひそめた。山の中腹を覆っていた雪雲が徐々に消え去り、日が射しはじめた。神秘的な連峰が日射しを受けてきらきらと輝く荘厳な雪景色が目前に広がった。

随員たちが嘆声をあげて神秘境に酔いしれている時、総書記は微笑をたたえて言った。

白頭山が主人を見分けたようだ、と。

板門店の霧

1996年11月某日の夜明け、金正日総書記は朝鮮半島を北と南に分けている軍事境界線上の板門店（パンムンジョム）を視察した。

1950年代の朝鮮戦争以来、朝米間の軍事的対決が持続し、米軍と南朝鮮軍が軍事境界線上で随時軍事挑発を強行していた状況下にあって、総書記が訪れるというのは思いもよらぬことだった。

総書記一行が板門店に近づく時、突然濃霧が立ち込めはじめた。

総書記は敵の銃口が常時向けられている板門店のあちこちを見て歩き、敵前20～30メートルの前方まで視察した。総書記が長時間留まっている間、霧は依然として晴れず、あたかも守護神のように総書記の行く先々を包んでいた。

その霧は、総書記が帰路につくと同時に跡形もなく消え去った。

後にその事を知った米軍と南朝鮮軍の首脳たちは驚愕の声をあげたと言う。

前軍事停戦委員会の「国連軍」側書記長は、朝鮮人民軍側の代表に次のように告白した。

── 去る11月27日の朝、貴方の最高司令官が板門店を訪れたという報道を聞いたわが方の司令官（南朝鮮駐屯米第8軍司令官）がわたしを呼んで、君はその日板門店に出ていたのに、なぜそのことを知らなかったのかと詰問した。当日霧が深かったので何も見ることができなかったと言うと、彼はそれ以上追及しなかった。金正日最高司令官が道術を使って霧を立ち込めさせたようであ

った。まったく神秘にたえない――

「不思議なことだ」

2000年5月某日、朝鮮の北西部に位置する平安(ピョンアン)北道のある農場で管理職員と農業問題について話を交わしていた金正日総書記は、ふと農道に止まっているトラクターに目をとめ、歩み寄った。

総書記は丁重に挨拶する運転手に、エンジンをかけてみるようにと言った。

「はい」と元気よく答えた運転手は左側のドアを開けて運転席につき、エンジンをかけた。たくましいエンジンのうなりが野良に響き渡った。

機関の具合を確かめた総書記は満足して右側のドアの方に近づいた。

運転手はあわてた。右側のドアは故障していたからである。

（どうしよう、あのドアは開かないのに……）

運転手は唇をかんだ。

ドアの前に立った総書記は取っ手をつかんで引いた。

一瞬、不思議なことが起こった。あれほど頑として開かなかったドアが軽々と開いたのである。

運転手は怪訝な顔をして見つめた。

トラクターの運転台をしばらく見つめていた総書記は、ドアを閉めて、トラクターをきちんと管理するようにと言った。

総書記が立ち去った後、トラクターのまわりに人々が集まってきた。そしてさっき総書記が開けてみたドアだから問題なく開くものと思って、われもわれもと取っ手に手をかけてみた。

ところがどうしたことか、ドアは開かなかった。何人もが代わる代わる手がけてみたが、ドアはびくともしなかった。のちにいろいろな修理工具を使ってやっと開けることができた。

「不思議なことだ……」

人々は首をかしげて嘆声をもらした。

「そうだ、物を言えないトラクターも偉人を見分けたのだ！」

天気も偉人を見分ける

1983年6月、金正日総書記が中国を訪問した時のことである。

毎年夏季に入ると3日に1日は雨が降るという上海では、総書記の訪問を前にして台風が来襲して連日雨が降っていた。

ところが総書記が到着する数時間前に急に雨が止んだ。上海は元来、雨が止むと烈日が照りつけてとても蒸し暑くなるのだが、その日はさほど暑くもならなかった。総書記が滞在していた間、引き続き天気はよかった。

総書記が上海の訪問を終えて訪れることになった青島は、深い霧に包まれていたが、総書記の到着を前にしてからりと晴れあがった。人々は口々に「天気も偉人を見分ける」とささやきあった。

こういうことは2010年5月にもあった。

総書記が天津市に到着する前日から、当地では大雨が降っていた。

ところが総書記が天津駅に到着するころには、市の中心部だけ雨が止んだ。

しかし、総書記が参観することになっていた海岸の港区域ではなお雨が降り続き、埠頭は一面水浸しだった。そこで中国側は車で総書記を埠頭に案内することにした。

ところが総書記が港の総合ビルで港の沿革と展望図、建設模型の説明を受けてから埠頭の方へ向かうと、その先の方から急に雨が止んだ。

同行した中国側の代表は驚きを隠しきれなかった。そして、車を準備しなくてもよくなったのでほっとしていた。

二つの埠頭を見て回るのに40分ほどかかった。その間、近くの海上では雨が降り続いたが、参観コースには全然雨が降らなかった。

総書記が参観を終えて車に乗り港を後にすると、また埠頭に雨が降り始めた。

この日の不思議な自然現象について中国人たちはこう言うのだった。

── まったく驚くべき現象だ。天の配剤としか他に言いようがない。総書記は本当に天が賜った方だ！……

陽光を抱いて歩く人

「金正日、暴風を退ける」

これはロシアの新聞『トルード』2002年8月24日付けに載った記事の見出しである。

その前日、総書記がロシア沿海州のウラジオストックに滞在していた時、強い温帯性低気圧の暴風が2回も襲ってきた。しかし、総書記がプーチン大統領と対面する時には、不思議にも暴風がおさまった。その前年、総書記がサンクト・ペテルブルグを訪問した時にも、暴風の暗雲が消え去ったとのことである。

ロシアの新聞『コムソモルスカヤ・プラウダ』は「金正日同志は天気を手なずける」という見出しの記事を載せた。

それによると、2001年7月26日早朝、朝鮮の指導者が乗った列車がロシア国境のハッサン駅に近づいた時、駅構内に濃霧が立ち込めて一寸先も見えないくらいだった。

ところが列車がホームに入ってくると、空が急に晴れ渡り、陽光がさんさんと降り注いだ。

このような現象は、列車がモスクワへ向かう途中のノボシビルスクでも、オムスクでも起きた。

ロシアの人々は、金正日総書記は陽光を抱いて歩いていると言ったそうだ。

2　英　知

総書記に聞く

1955年10月某日、金正日総書記が平壌第1中学校に通っていた時のことである。

世界史の授業で、教員は古代のある国の戦争史について講義しながら、戦争は芸術だと言った。

教員の説明が終わると生徒の1人が立ち上がった。

「先生、戦争は芸術だというのはどういう意味ですか」

教員は口ごもり、すこし研究して次の時間に説明すると言葉をにごした。

休み時間になるといつものように、生徒たちは金正日総書記に説明してくれるよう求めた。

総書記はまず交響楽を例にあげ、戦争もそれと同じだと言って次のように話した。

―― 交響楽は高度の組織性と精密性、繊細な調和、最大の精力と緊張、これらのものが集大成されている芸術である。戦争ではすべてのもの、すなわち人的・物的資源と精神力が高度に集大成されるだけでなく、明確で緻密に組まれた戦略と戦術が求められ、科学と技術の成果がすべて動員されなければならない。ここで重要なのは、これらすべてをすきまなく繊細かつ精密にかみ合わせ

ることである。もしこれらのうちの一つが欠けても戦争に敗ける。まさにこのような意味で戦争は芸術だと言うのであり、ここから軍事芸術という言葉も生まれるようになった……

ついで総書記は、金日成主席は抗日武装闘争と祖国解放戦争（1950年代の朝鮮戦争）を指揮しながら、独創的な軍事戦略と戦法を創出した、これは戦争史にかつてなかった卓越した軍事芸術であると語った。

同級生のあいだから一斉に拍手がわき起こった。

世紀を越えて持ち越されてきた矛盾点

金正日総書記が金日成総合大学に入学して1カ月足らずの1960年9月のある日のことだった。

その日の午後、総書記は政治経済学講座を訪ねた。

教員たちに挨拶をした総書記は、受講後教材を見て考えさせられることがあってやって来たと言った。

教員たちは総書記の言葉に耳を傾けた。

総書記は、今政治経済学では生産力の構成に人間の労働力と生産手段を含めて扱っていると述べた。

それは一世紀以上前からの固定した理論であり、また政治経済学の専門家であれば初歩的な常識となっていた既成理論であったので、教員たちはうなずいて聞いていた。

ところが総書記は、それは結局生産力の構成に労働対象まで含め

ていることを意味するのではないか、そうではなく生産力は労働力と生産道具で構成されていると見るべきではなかろうか、と疑問を提した。労働の対象は生産力になり得ないということである。

一生を政治経済学の研究にささげてきた老教授も、錚々たる新鋭の教員たちもただ呆然として互いに顔を見合わせるのみであった。

総書記が指摘したのは明白な矛盾点の発見だった。

政治経済学という学問が生まれて以来、世紀を越えて持ち越されてきた矛盾点の発見だった。

教員たちは、マルクスの経済学理論ではそうなっている、今学界でこの問題について論争されている、と弁明じみた回答をした。

総書記はこう述べた。

── 金日成主席は、生産力はたとえて言えば軍隊の武装力と同じだとして、武器とそれを扱う人間が武装力をなしていると教えている。武装力が軍人と武器からなっているなら、生産力が人間と生産道具からなっているというのは自明のことではないか……

一世紀にわたって学界に残されていた矛盾点はついに総書記によって解決されたのである。

チュチェ哲学と人間哲学

1974年4月のある日、金正日総書記はチュチェ哲学について関

係部門の幹部たちと話を交わした。

そのころ社会科学者のあいだにはチュチェ哲学を人間哲学と同一視する偏向が現れていた。

それについて総書記はこう述べた。

「もともと人間哲学は発生して久しく、またさまざまな流派がありますが、それらはみな純然たる人間問題を対象にしています。人間哲学は世界観を与える科学としての哲学本来の使命を否定し、主に人間とは何か、人生とは何かという問題を論ずる一つの人生哲学です。

チュチェ哲学はこれとは違います。チュチェ哲学は世界における人間の地位と役割に関する問題を哲学の根本的問題として提起し、人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明らかにしました。チュチェ哲学の根本は純然たる人間問題ではなく、世界と人間の関係であり、チュチェの哲学的原理は単なる人生観ではなく、世界観を明らかにした原理です。チュチェ哲学は人間中心の世界観、チュチェの世界観を明らかにした哲学です」

総書記は、チュチェ哲学は人間に対する見解も、以前の哲学とは違って新たに示したことを強調し、次のように言葉をついだ。

―― 人間の本質を社会関係の総体と規定したマルクス主義の創始者たちも、人間に対する哲学的解明において大きな前進をもたらしたものの、自然と社会の支配者、改造者としての人間の本質的特性を全面的に解明することはできなかった。ただチュチェ哲学だけが初めて自主性と創造性、意識性が社会的存在である人

間の本質的特性をなすということを明らかにすることによって、人間に対する完璧な解明、人間の地位と役割に対する正しい哲学的解明を与えた……

金正日総書記は彼らを見回し、確信に満ちた表情で言明した。

「チュチェ哲学は人間の本性と世界の支配者、改造者としてのその地位と役割を新たに解明することによって、人間の尊厳と価値を最上の境地に押し上げました。これはいかなる哲学思想も成し遂げることができなかったチュチェ哲学の大きな功績です」

生け捕ったカモメ

1967年8月のある日、金正日総書記が朝鮮の東部に位置する咸鏡(ハムギョン)南道への現地指導に当たっている時のことだった。

東海の海岸線に沿って走っていた車がある岩角に至った時、総書記は少し休んで行こうと言った。

車から降りた総書記は、青い波間をかすめて自由に飛び交うカモメをしばらく見つめていたが、何とか一羽生け捕ることができないだろうかと言った。

随員の一人が捕れると言った。

「どんな方法で」

「銃があります」

「銃で？　そんなやり方なら誰でもできる」

総書記は生きたカモメが必要なのであって、銃で撃ち落したカ

モメは役に立たないと言った。

（生きたカモメをどこに使おうと言うのだろうか……）

総書記は、数日前行って見た咸鏡南道道都の咸興（ハムフン）動物園には見物人が多い割合に動物は多くなかった、別に珍しい鳥ではないが、われわれが動物園を見物した記念に、そして動物園に来る咸興市の勤労者や青少年のために一羽生け捕って送ってあげようと思うのだと言うのだった。

みなよい考えが浮かばず考え込んでいる時、一人が銃でカモメを生け捕りできそうだと言った。

総書記は自分も今そう考えていたところだったと言って微笑した。

（銃でどのように生け捕りにするというのだろうか……）

いぶかしがる随員たちに総書記はこう説明した。

鳥類は概して臆病であるうえに身を大事にするため、銃弾がかすめただけでも度肝を抜かしてしばらく飛べない、この点を利用するのだ。

総書記の名射撃術を知っている随員たちは早くその腕前を見たがった。

総書記は銃弾をこめて崖っぷちに近寄った。

敏感なカモメたちはいつの間にか気配を感じて遠くへ飛び去ってしまうのだった。

総書記は少々難しいが遠くの方を狙わなければならないと言って、かなり遠くの崖のカモメに狙いを定めて引き金を引いた。

カモメが一斉に飛び去った。

ところが岩場に止まっていた一羽のカモメが飛び立ちかけてまたもとの場所に舞い戻ってきた。

随員たちは歓声をあげて現場に駆けつけ、大きなカモメを捕らえてきた。

総書記はカモメの翼や足を注意深くさわり、羽毛をなでながら傷ついていないことを確認した。銃弾を受けて砕けた小石が若干かすっただけで、痛めたところはなかった。

総書記はカモメを咸興動物園に届けるよう随員に言いつけた。

一目で見分けた鶏

1967年9月のある日、金正日総書記がある養鶏工場を訪ねた時にあったことである。

総書記が立ち寄った親鶏舎では大きく肉づきのよい鶏が遊び場に出て遊んだり、ケージの中で産卵したりしていた。

幹部から、金日成主席が贈ってくれた卵をかえして育てた初の肉生産用鶏だという話を聞いた総書記は、鶏をよく育てたと従業員の労をねぎらった。

満足したまなざしで肉用鶏の群れを見つめていた総書記は、多くの鶏の中から1羽の鶏を指してこうたずねた。

「あの鶏も肉用鶏かな。せっかちに餌をついばんでいるあの鶏だ」

総書記が指差すところを見ると、本当に1羽の鶏がひときわせ

っかちに餌をついばんでいた。

総書記は、もしかして採卵用鶏が肉用鶏の群れに混ざったのではないかとたずねた。

即座に返答できる人はいなかった。

総書記は微笑をたたえて言った。

「肉用鶏は性質がゆったりしていてあわてないが、採卵用鶏はせっかちなのが特徴です」

そして恐らくあの鶏は卵をたくさん産む鶏だろうと言った。

幹部はその鶏を捕らえて細やかに観察してみた。

案の定、採卵用鶏であった。

いつも鶏舎で特徴が違う鶏が混ざらないように観察し検査している飼養員でさえ発見できなかったその鶏を、総書記は大きさも外形もほとんど同じ数多くの肉用鶏の中から一目で見分けたのである。

3カ国語でうたった歌

1971年6月、朝鮮で社会主義労働青年同盟（金日成社会主義青年同盟の前身）第6回大会祝賀公演の準備を進めている時のことであった。

金正日総書記は音楽編成係を呼び、今度の祝賀公演でうたう朝鮮の歌は選定したが、外国の歌は何がよいだろうかとたずねた。

音楽編成係はすぐさま答えることができなかった。まだ考えて

いなかったのである。

総書記は、今回の大会には多くの国の代表団と代表が参加するので、みんなが一緒にうたえる歌として『世界民主青年歌』はどうかと言った。そして歌の三つの節を英語やフランス語、スペイン語といった外国語でそれぞれ歌うようにしようと言った。

やがて金日成主席を迎えて、朝鮮社会主義労働青年同盟第6回大会祝賀公演が繰り広げられた。

舞台では女性重唱『世界民主青年歌』がうたわれ、歌手たちが第1節を英語で歌うと英語圏の代表たちがそれにならってうたい、第2節をフランス語でうたうとフランス語圏の代表たちが手拍手を打ち鳴らしてうたった。第3節目がスペイン語になるとスペイン語圏の代表たちが総立ちになってうたった。

音楽編成係はわが目を疑った。

歌が終わると代表全員が熱狂的な拍手をもってアンコールを求めた。

歌は再び会場に響き渡った。

各国の代表たちは再び立ち上がって合唱に和した。『世界民主青年歌』が人類の大合唱としてうたわれたのである。

新しい叢書形式

金日成主席の革命活動史を集大成し、全面的に、体系的に掘り下げて形象化した叢書『不滅の歴史』にも金正日総書記の英

知がこもっている。

この叢書作品が世に生まれる以前、創作家たちは主席の革命活動史の膨大かつ豊富な内容を小説という器にどのように盛り込むかという問題で苦心していた。

1971年8月のある日、ある創作家に会った総書記は、金日成主席の革命活動史を数編の長編小説で描き出すのは到底不可能なことだとし、小説を時期別に違った題名にして多部作の形式にすることもできるし、一つの総題目の中に順に番号だけつけていくこともできる、しかし主席の革命活動史の偉大さからしても、またその膨大な内容の幅からしても、叢書形式にするのがよさそうだ、そうすればそれぞれの長編小説がみなその独自の意義を持ちながらも統一性を保つことができるはずだ、と述べた。

創作家の頭には、世界文学史に記されている叢書作品であるバルザックの『人間喜劇』とエミール・ゾラの『ルーゴン・マッカール一家』が浮かび上がった。

バルザックはその叢書『人間喜劇』に90数編の小説をおさめ、ゾラは『ルーゴン・マッカール一家』に20編の小説をおさめた。

総書記は創作家の考えを推察するかのように、まだどの国でも労働者階級の領袖の革命活動史を規模の大きい文学作品形式で形象化した経験がないため、この問題を新たに開拓すべきだとし、こう述べた。

「金日成同志の栄光に満ちた革命活動史は、もっぱら朝鮮式の新しい叢書形式で集大成してのみ全面的に、体系的に、そして深く掘り下げて形象化することができ、叢書体系内のそれぞれの

作品が小説としてのその特色をもって文学的な感化力を高めることができます。

金日成同志の革命活動史をたどる叢書の題名は『不滅の歴史』とするのがよいでしょう」

フォルテを探せ

2005年3月のある日、金正日総書記が朝鮮の勲功国家合唱団の大重唱公演を鑑賞した時のことである。

公演が終わると総書記は、ピアノの音が弱すぎて伴奏がなきにひとしいものだったと指摘した。そして指揮者にピアノという楽器名の意味を質した。

弱くあるいは強く演奏できるという意味で実際の名前はピアノフォルテだという答えを聞いた総書記は、そのとおりだと肯定し、こう述べた。

── もともとピアノという楽器の固有の名前はピアノフォルテで、それは弱くも強くも演奏できるという意味だ。ところがきょうのピアノ伴奏はピアノという意味だけ表し、フォルテという意味は表せなかった。フォルテはどこへ行ったのか？……

指揮者は顔を赤らめ、答えることができなかった。

総書記はおおらかに笑って言葉を続けた。

── わたしは最初の曲目を聴いた時から、指揮者が伴奏を抑制していたことがすぐ分かった。指揮者は恐らくピアノの伴奏が荘

重になると大重唱の声が押さえられると思ってそうしたのであろう。指揮者がピアノ伴奏を抑制する場合、歌の持ち味が生かされず、音声の不安定さがきわだってしまうということを考えなかったようだ。指揮者は音楽演技指導を多角的、具体的によく見て慎重にしなければならない……

総書記の分析と判断は正確だった。指揮者は歌唱演技に重点を置き、伴奏をそれに従わせようとしたばかりに、ピアニシモ、つまり音を弱くすることを求めたのだった。

総書記はピアノの伴奏でさまざまなハーモニーとリズム、いろいろな演奏手法を適用することについて具体的に述べたのち、心機一転して革新してみなさい、フォルテを必ず探すことだ、と言った。

「分かりました。フォルテをきっと探します」

その後、総書記は再び大重唱公演を鑑賞した。公演は大成功だった。

明哲な予言

森羅万象が眠りに落ちた1979年10月20日の夜半だった。

幹部たちと席をともにした金正日総書記は、南朝鮮の朴正熙（パクチョンヒ）「政権」内部の軋轢（あつれき）と維新独裁に反対する人民の闘争を総括、分析してこう言った。

「維新独裁はもう命が尽きた」

幹部たちは訳が分からず、互いに顔を見合わせた。

その時までアメリカを笠に着た独裁者の気勢があまりにも盛んであったからである。

怪訝な顔をする幹部たちに、総書記は確信に満ちた口調でこう言った。

「南朝鮮社会の深刻な矛盾と情勢の兆候からして、何かしら衝撃的な事件が起こりそうです。今や朴正熙維新独裁の終末が予測されます。アメリカ人が自分の手で朴正熙を片付けてしまうかもしれません」

それから6日後の10月26日、朴正熙射殺事件が起きた。

事件は米中央情報局がひそかに仕組んだものだった。総書記は千里眼の眼差しで陰謀の本源を見抜いていたのである。

総書記の予言の正確さを示す実例はこれだけでない。1987年11月のある日、総書記は当時のソ連の実態について言及し、ソ連は「ペレストロイカ」のためにつぶれることになるだろう、ソ連がこういう行き方をしていては2、3年の間に何かしら事変が起こりそうだ、社会主義の旗が下ろされ、資本主義の風が吹き込むだろう、多民族国家であるソ連の民族問題も複雑になるだろう、と予言していた。

1991年1月に湾岸戦争が起こった時にも、多くの人々はフセインの意気盛んな気勢から見てイラク軍は簡単に敗けはしまいと予想したが、総書記はイラクは数週間も経たずして白旗を掲げるだろうと予測していた。

どんな将軍が名将なのか

歴史家たちは驚嘆すべき勇猛と神妙な知略をもって大軍を打ち破った将軍を名将と叙述してきた。

しかし、長い間外交部門の要職にあり、古今東西の将軍たちの伝記をほとんど読んでいた1人の幹部はそれに疑問を抱いていた。

本当の意味での名将とはどういう人であろうか……

1985年6月のある日、彼は金正日総書記に会った機会にそのことを話した。

総書記は、それは見る人によって違いがあるはずだが、あなたはどう思うかと問い返した。

彼は東西で3大将軍だとか7大将軍、10大将軍だとか言っているが、どんな将軍を名将というべきか見当がつかない、と言って自分の読んだ将軍伝の人物たちを数えあげた。アレキサンダー大王、ハンニバル、カエサル、スパルタクス、ナポレオン、クトゥーゾフ、ジンギス・カン、諸葛亮、ジューコフ、スターリン……

総書記は微笑をたたえ、ベートーベンはナポレオンを人間の権利と民主主義のためにたたかう英雄豪傑として称賛する有名な第3交響曲を創作したが、彼がやがて帝位を簒奪(さんだつ)し暴君になることを知り「やはりあの男も取るに足りない人間だったのか」と言って交響曲の表紙からナポレオンの名を消してしまった話を想起させ、こう言うのだった。

―― ベートーベンの交響曲『英雄』の創作経緯が示しているように、歴史家たちがいくら英雄だの、名将だのと称揚しても人民はそれを認めない。執権欲に取りつかれて権力を奪取しようとする野心家たちと、銃剣によって人民を支配する独裁者、大陸や世界征服を試みた侵略者はいくら勇猛であっても人民から見捨てられる ――

どんな将軍が名将になれるのか……

総書記は即座に明快な解明を与えた。

「名将は人民大衆の自主性を実現するための正義の戦いで歴史的な功績を立てた将軍たち、祖国と民族の運命を開拓して人民の記憶に永遠に残る将軍たちです」

耳朶を打つ総書記の言葉に興奮した彼は、歴代の名将のどんな気質を称えることができるのでしょうか、と重ねて質問した。

「だんだんややこしい質問になってきたね」

総書記は笑った。そして古代ローマの奴隷暴動の指導者スパルタクス、ナポレオンを敗退させたロシアのクトゥーゾフ、前ソ連の元帥・4重英雄ジューコフ、大元帥スターリンなど代表的な名将の話をした後こう言った。

「わたしは、名将が備えるべき気質は非凡な英知と知略、強靭な信念と意志、無比の胆力と気骨、熱い情熱と仁徳だと思います。言い換えれば、思想で打ち勝ち、信念と意志で打ち勝ち、胆力と気骨で打ち勝ち、情熱と仁徳で打ち勝つ将軍を名将というべきです」

メーデーに対する新たな理解

1889年7月、パリで開催された第二インターナショナル創立大会で、1886年5月1日に8時間労働制実施のスローガンを掲げてアメリカ・シカゴの労働者が闘った日を毎年全世界労働者階級の国際的記念日にすることを決定したその日から、世紀をまたいで100余年の歳月が流れたが、メーデーを労働者階級の国際的祝日として呼ぶことに異議を唱える人はいなかった。

2006年5月1日、幹部たちと席をともにした金正日総書記は、これまでメーデーを全世界労働者階級の祝日としてきたが、これからは理解を新たにする必要があると述べた。

いぶかしがる幹部たちを見回し総書記は、メーデーはもとをただせば、資本の搾取と抑圧に反対し、生きる権利と民主主義的自由のための闘争で労働者階級の戦闘的威力と革命的団結を示威する国際的祝日として生まれたが、今日に至っては単なる労働者階級の祝日とばかりは言えないと言って、その論拠を一つひとつあげた。

科学技術が急速に発展する情報産業時代に入った今日、労働者階級の労働は以前とは比べようもなく技術化、知能化し、インテリ化しているということ、精神労働に従事する労働者が急激に増大し、労働者も知識人もみな同じように技術労働、精神労働をする勤労者になっているということ、このように変化した時代的背景と現実的状況にあって、メーデーを単に全世界労働者階級の国

際的祝日だと教条的に受け入れる必要はないということ……

科学的論拠と理路整然たる主張によって、変化した労働者階級の立場と社会階級関係に関する明確な表象を与える総書記の話を聞き、幹部たちは機械制産業時代の労働者階級と情報産業時代の労働者階級の違いについて新たな認識をもつようになった。

総書記はメーデーを全世界勤労者の祝日とすべきである、勤労者という枠組みの中には労働者、農民、知識人がみな包括されると語り、言葉を続けた。

―― メーデーを全世界労働者の祝日とするのは朝鮮労働党の性格にも合わない。わが党は労働者、農民、知識人の先進分子たちで組織された勤労人民の大衆的党である。ところが、メーデーを労働者階級の祝日だと言えばわが党の大衆的性格が矮小化される感じがする。わが党の理論誌の名も『勤労者』であるし、わが党の革命的で大衆的な性格に即して、メーデーを勤労者の祝日とするのがよい……

そしてこれからは「全世界の労働者団結せよ！」のスローガンも「全世界の勤労者団結せよ！」に改めるべきだ、と述べた。

独特な文章作法

1988年10月のある日、金正日総書記に同行して平壌市を見て回っていたある幹部は、ふと総書記の独特な文章作法を話題にした。

これには訳があった。

向学の念に燃えていた若いころ、彼も古今の哲学者たちが残した著作を少なからず読んでみたが、おおよそ叙述が複雑で論理がややこしいのが特徴だと言おうか、とにかく理解しにくいのが一つの共通点であった。

しかし金正日総書記の著作は一度読めばあたかも山頂に登って前方を見渡すようにすべてが明らかで、もう一度読み返してみれば意味が深く味わえるのが特徴であった。

明白な主義主張と透徹した論理、理論展開での一目瞭然性、理論解明での通俗性、言語の人民性、資料を裏打ちする親切さ、これが総書記の著作に貫通している特徴だと言えた。

その独特な文章作法の中でも特異なのは、巨大な思想を集大成して明白に表現するすぐれた集約力であった。スターリンがレーニンの革命思想を総合、集大成した『レーニン主義の諸問題』は246ページに達したが、総書記が金日成主席の革命思想を総合、集大成した古典的著作『チュチェ思想について』は86ページにすぎなかった。

このように自分の思想を集約化して表現する独特な才能をもっている人であるがゆえに、その談話、演説、論文などは簡潔でありながらも哲学性が深いのである。

総書記は、あなたの言っていることはわたしの話や文章に対するほめ過ぎだと言ってこう述べた。

「わたしは文章を書くたびに『文は短いが、思想は深く、表現は簡単であっても意味は明白に』することを座右の銘としています」

ロシア正教寺院の鐘の音

2002年8月、金正日総書記がロシアの極東を訪れた時のことである。

列車がハバロフスクに近づいたころ、総書記はきょうロシア正教寺院である聖者インノケンチ・イルクーツキ寺院を参観することにすると言った。

随員たちは驚いた。

「将軍、正教寺院は信者たちが訪ねるところではありませんか」

総書記は、自分は信者ではないが、宗教も政治の対象になるから見ようというのだと言って語をついだ。

―― ロシア人民が好んで信じる宗教であるから、われわれが正教寺院を参観するのはよいことであって悪いことではない。われわれは決して偏狭であってはならず、他民族の慣習を尊重すべきだ。正教寺院を参観すればロシア人民の風俗も知り、彼らが何を考え何を志向し、何を願っているのかという内面世界も知ることができるし、6000万名に達する正教信者とも親しくなれるのだからよいことではないか――

総書記は、政治家であれば当然、宗教についても深く知る必要があるとして、ロシア正教の発生と発展の歴史について、そして今日世界に存在する15の独自の正教教会のうち一番大きい教会とみなされているロシア正教が国政に無視できない影響を与え

ていることを具体的に語った。

総書記が正教寺院に着いてしばし周囲の環境や寺院の外観を見ている時であった。

突如、太く荘重な鐘の音が響いた。

みんなの目は一斉に鐘の音が響く方へ向けられた。

寺院の院長は鐘楼を指差して、金正日将軍を歓迎して寺院の鐘楼守が鐘をついている、寺院の鐘は誰でもつけるものではなく、鐘のつき方を教える学校を出た人だけがつくのであって、今鐘をついているのはそういう鐘楼守の中でももっともすぐれた人だと説明した。

ロシア正教の儀式では、太陽が中天に昇った正午に鐘をつくのが戒律になっているが、きょうに限ってその慣例を破って午前に鐘をついていると言って、院長は胸に当てた両手を万歳を呼ぶかのように大きく広げ、興奮の色を浮かべてこう言った。

「わが寺院に太陽が訪れました。太陽が訪れたのですから鐘の音を響かせるのは当然なことです」

太陽と朝焼け

金日成主席が永生の姿で安置されている錦繡山（クムスサン）記念宮殿の玄関ホールに主席の立像を建立する時のことである。

創作家、設計家のあいだでは立像の背景についていろいろと論議された。雄大な平壌の全景を描こうという意見、白頭山天地の

神秘境を描こうという意見、万景台（マンギョンデ）の美しい景色を描こうという意見……

さまざまな意見が出たが、どうしても絵によって背景を処理するのは主席の立像に似つかわしくないということに意見が集約された。

ではどうすべきか。

協議を重ねた末、彼らは立像の背後の壁に白い大理石をあしらって背景を清潔に処理することに合意し、それを図案に反映させた。

1995年1月のある日、錦繡山記念宮殿に来て図案を見た金正日総書記は、ホールの床と壁が石張りのうえに背後の壁まで石張りにしてはホール全体が要塞のように見えてしまう、と指摘した。

しばらく物思いにふけっていた総書記は、立像の背面を白色の樹脂で塗装し、そこに朝焼けを象徴する照明を照射する方法で処理すべきだ、そうすれば金日成主席の立像が太陽の姿でより強くシンボライズされる、と述べた。

「太陽と朝焼け！」

人々は嘆声をあげた。

ついに主席の立像の背景が完成された。

朝焼けを背景に神々しく立つ主席の姿は人々を限りない感激にひたらせた。

ロシアの社会活動家であるウラジミル・トルスチコフはこう言った。

「わたしは金日成主席の立像に慎んで挨拶をし、全世界を照

らすが如き朝焼けから目を離すことができなかった。
　そうだ、太陽があって生まれ、太陽とともに生き続ける朝焼けが太陽のあるところに照り映えるのは理の当然である」

無 限 大

　朝鮮のある家庭ではこんなことがあった。
　朝、起きしなに壁にかかっているカレンダーをめくっていた小学校1年生の末っ子は、7月の暦に目をとめてくぎづけになってしまった。少年の目には涙がにじんだ。
　8日が黒い枠で囲まれていたのである。
　少年は急いで筆箱からナイフを取り出した。そして黒い枠を削りはじめた。
　父親がどうしたことかと聞くと、少年は涙声で言うのだった。
　「大元帥さまは亡くなっていないのに、何で8の字に黒いしるしをしたの。大元帥さまは誕生した日はあっても亡くなった日はないよ。このカレンダーは間違っているよ」
　こういう事実について報告を受けた金正日総書記はしばらくの間無言でいた。
　しばらくして総書記はうるんだ声で、金日成主席を忘れえず懐かしみ、主席の永生を願うのが人民の切なる心情だ、これからはカレンダーの7月8日に黒い枠をつけるべきではない、と言った。

その後しばらくして、総書記は幹部たちとともに金日成主席を回顧しながらふと、8の数字を寝かせれば無限大になると言った。

幹部たちは驚きとともに大きな感動を覚えた。

大国葬とともに悲しみの象徴となった8の字と永遠を表す∞の記号。

総書記は、わたしは無限大の記号のように、この地に主席の歴史がいつまでも流れるようにする、と明言した。

なぞなぞ

2000年10月、米国務長官オルブライトが訪朝した時のことである。

金正日総書記が同席した宴会でオルブライトはにわかに宴席を見回してこんななぞなぞを出した。

10本の指で16の数字が出るようにするにはどうすればよいのか……

宴席の雰囲気はたちまち緊張した。

この時だった。

金正日総書記は、それは何も難しく考えることはないと言った。

そして両手をかざして2本の親指を「×」の形に組み、あとの両手の4本の指を開いて見せた。

４×４！……

宴席では歓声があがった。
オルブライトが真っ先に拍手を送った。

科学者たちの感嘆

2001年の夏、金正日総書記がロシア訪問の途中でロシア科学院シベリア分院を訪ねた時のことである。
分院責任者の案内を受け、研究成果を示す図解パネルの前にきた総書記は、案内者の説明とグラフを対比して見るとともに、そこに記された無数の数値や記号、公式などを興味深く見つめ、すぐうなずいた。そしてグラフの曲線を指差し、標準値と測定値がほぼ一致しているのは研究の成果が良好であることを意味すると言った。
総書記が自分たちの研究成果に対して予想外に深く理解してくれただけでなく、称賛してくれたことに気をよくした案内者は、グラフの横の図表パネルの前に来て熱心に説明しはじめた。
彼の説明を二言三言聞いた総書記は、分かったから他のものを見ようと言った。
案内者が怪訝な顔をすると総書記は、図表とグラフを指差して、この図表はグラフを図表化しただけなのに、なぜまた説明する必要があるのか、説明なしでも十分理解できると言った。
総書記がフルニチェフ名称宇宙科学センターを参観した時も同様であった。

センターの研究設備を一つひとつ具体的に見届けた総書記は、これが宇宙ステーション「ミール」の模型なのかと案内者にたずねた。

案内者はそうだと答えた。

しばし「ミール」号の外形を見つめていた総書記は、一度上がってみようと言った。

宇宙ステーション「ミール」号について言えば宇宙科学技術の総合体、結晶体として長い間ロシアが誇りとしてきたものであった。それでロシア側は有能な専門家に説明させるよう特別措置を講じていた。

ところが船室に入って内部を見回した総書記は案内者の説明を待たずに分かると言ってうなずいた。そして船室のあちこちを指差しながら、これは宇宙飛行操縦盤で、あれは宇宙飛行士たちの居室であり、またこれは他の室に入る連結路であり、あれは宇宙空間に出る脱出口だと内部構造を一つひとつ説明した。

ロシアの科学者の一人はこう言った。

「金正日総書記がすべての分野に対する深い知識をもった傑出した人物であることは知っていたが、宇宙科学分野にまでこのように精通しているとは知らなかった。総書記は実に驚くべき天才だ」

3　献　身

雷鳴がとどろいても

金正日総書記は1966年5月から1969年7月までの間、マルクスとエンゲルス、レーニンの主要著書を全面的に研究、分析した。それらの著書はマルクスの『資本論』5分冊を1巻と見て全31巻だった。

そのころを回想して、総書記はこう語った。

「あのころは本当に眼が充血するのも忘れて本を読み、のどがかれるほど討論したものです。実に忘れがたい篤学研究の期間でした」

その日々にはこんなこともあった。

ある日、総書記は数人の幹部と一緒に書斎で、数日後に分析することになっているある文献を熱心に読んでいた。

ところが昼間から雷が鳴り、豪雨が降りしきった。

しかし総書記は依然として本のページをめくり続けていた。

総書記が本から目を離したのは夕闇が迫ったころだった。そして水浸しになった窓の外を眺めてびっくりした。

「これはいつから降り出した雨ですか」

「昼からです。雷もものすごかったです」

「そうですか。わたしは本を読むのに夢中になっていて、全然

知りませんでした。きょうはけっこう収穫がありました。きょうの午後にこの本を全部読みました」

総書記は満足げに明るく笑った。

茂浦の釣り場

1971年9月のある日、金正日総書記に随行した一行が金日成主席の抗日革命事跡が残っている茂浦(ムポ)宿営地の踏査を終えた時だった。

「親愛なる指導者同志、ここ豆満(トウマン)江上流にはイワナが多いと言いますから、釣りをしてみてはどうですか」

総書記は随員の勧めに快く応じた。

一同は歓声をあげた。

釣りが始まり、あちこちでイワナを釣り上げる随員たちの歓声があがった。

ところが、総書記が釣り糸をたれた川岸では何の気配もなかった。

おかしく思ってそっちへ近寄った随員はその場に立ちすくんでしまった。

川に釣り竿をたれた総書記は、大きなイワナが餌に食いついているのも知らず、深い思索にふけっているのであった。

「親愛なる指導者同志！……」と呼び掛けられてわれに返った総書記は、随員の方に向き直って茂浦の景色はすばらしい、こうして釣り糸をたらしてじっと座っていると胸のつかえがほぐれ

てくる、と言うのだった。

随員はせっかく休息してもらおうと願ったことが、水の泡になってしまったともどかしがった。

ところが総書記の言葉が彼の胸を打った。

―― 考えてみたまえ、何と厳しい歴史がこの川筋とあの密林にこもっているのか。この世のどこにも金日成同志のようにこんなに険しい道を踏み分けて革命を導いてきた人はいない。人民がうたっているように、金日成同志は白頭の精気を宿した伝説的英雄であり、現代史に実在する偉大な人物の中でももっとも偉大な人物である。金日成同志の偉大な革命思想はどの古典とも比べられない幅と深みをもっており、金日成同志の革命活動史は人類が永遠に心にとどめるべき不滅の英雄叙事詩だ……

総書記はしばし話を中断した後、われわれはまだ金日成同志の革命思想の世界史的地位を明らかにしていない、とくぐもった声で言った。

――偉大なチュチェ思想が世界数億の人民の心をとらえているのに、われわれはまだその革命思想を金日成主義と定義づけていない――

こう言った総書記は「金日成主義！……」とまた繰り返した。

総書記の大きく響く声が密林のしじまを破って響き渡った。

「豆満江の流れが永遠であるように、金日成主義はわれわれの時代だけでなく、未来の共産主義社会に行っても人民のたたかいの旗じるしとして光を放つでしょう」

立体的な思索

1987年3月のある日、求められた資料を持ってある幹部が金正日総書記の執務室に行った時のことである。

総書記は何か書いている最中だったが、その時電話がかかってきた。

総書記は彼に席を勧め、「ちょっと待って…」と言った。そして通話が終わると、彼に話しなさいと促した。

幹部は総書記がペンを置くのを待って、国際情勢に関する重要な資料を報告しようと静かに椅子に座っていた。

「かまわないから話しなさい」

総書記はそのままペンを走らせながら促した。

腰を浮かせて立ち上がった幹部は話しはじめた。

総書記はところどころで、それはもう知っている、それはいつの資料なのかと聞いたりした。そして説明を聴取しながら、分析と評価も同時に行った。

演説文を書いたり情勢を分析したりすることは、いずれも深い思索が必要な高度の精神労働である。そして一つの頭脳で二つの思索をし、分析、総合、推理、判断をしながら、一方では文章を書き、他方では話をするというのはほとんど不可能なことである。

ところが、総書記がその時に執筆中だった文章が、思想教育を強化することについての重要な著作であることを後日知った幹部はいっそう驚嘆してやまなかった。

ある幹部の疑問

いつのことか朝鮮労働党中央委員会のある幹部が金正日総書記に書状を差し上げたことがあった。

「親愛なる指導者同志！

わたしが国際映画会館の竣工式に参加して帰ってきてみると、今朝部署から提出した文書と早朝江原(カンウォン)道を出発する時に提出した文書がすでに決裁されて届けられていました。

わたしは自分の目を疑うほど驚き、感嘆してやみませんでした。

親愛なる指導者同志はいったいどの時間にこの文書をご覧になり、どの時間に決裁なされるのでしょうか。

親愛なる指導者同志は江原道を出発する時、車の中でひと眠りするとおっしゃられ、朝平壌に到着して朝食後すぐ国際映画会館の竣工式に臨まれたのに、どの時間に文書をご覧になったのでしょうか。

わたくしとしてはこの謎を解く術がなく、あえてペンを執った次第です。

わたしは同じ時間に親愛なる指導者同志に随行して江原道を出発し、車の中でひと眠りして家に到着し、食事をすませて服も着替えたりして時間がなく、秘書に到着したという電話もかけられませんでした。

決裁していただいた文書を受け取り、わたしは今良心の呵責にさいなまれています。

しかし親愛なる指導者同志、どの時間に3件の文書をご覧になって決裁してくださったのでしょうか。

とうてい解けない謎なので、ぜひ解いていただきたいと思います」

それから3日後の1989年5月のある日、金正日総書記はその幹部に会った時こう言うのだった。

「いつ文書を見て決裁するのか不思議がっていますが、別に驚くことはありません。わたしには仕事が多いではありませんか」

そうして、あなたと一緒に出発して早朝事務室に到着してみると、机の上に文書が山のように積まれていたので、部屋に入るなり文書を全部見て決裁したのだと言った。

そして時間を見ると行事の時間が迫っていたので、水一杯とパンを一つ食べて執務室を出かけようとした時、また急を要する文書だといって提出されたので、服の着替えもできないまま階段を下りながら文書を見た、これがあなたの言う謎に対する答えになるだろう、と言って笑った。

幹部は慎重な面持ちで言った。

「親愛なる指導者同志は個人の体ではありません。指導者同志はとりもなおさずわれわれの祖国であり、われわれの党なのです。……わたしは食事を抜かした問題を政治局の会議にかけます」

「あなただけに話した謎の答えを公開するというのだね。勝手にしたまえ。しかしだよ、誠実に個人の秘密を打ち明けたのに、誠実にそれを守ってくれるべきであって、それ守らないという法はあるのかね」

そして総書記は話を続けた。

―― わたしは仕事を残しておく性分ではない。机の上にわたしが見るべき文書が1件でもあれば、それをそのままにしておけない性分だ。わたしも人間なのだから腹が減れば食べ、疲れれば休まなければならない。……　わたしだからといって疲れないはずはなく、疲れれば眠たくならないはずもない。わたしは疲れても我慢するのだ――

千丈地下の切羽にも

遠い昔、ある将帥が馬に乗って越えながら、かぶとの先が天につかえそうで体をこごめたという伝説が伝えられる摩天(マチョン)嶺は山勢と谷間もまた険しい。この険阻な摩天嶺のふもとに位置している検徳(コムドク)鉱山を金正日総書記が訪れた。

それは1975年7月1日であった。

列車から降りたその足で当地の幹部に会って鉱山の実態を聴き、選鉱場へ行って労働者を鼓舞した総書記は坑の入り口に向かった。鉱山の幹部と随員、それに生産扇動隊としてきていた芸能人が坑内に入ってはいけないと言って、総書記の前に立ちはだかった。

総書記は彼らを見回して次のように語った。

―― 金日成同志が訪ねた坑であり、鉱夫たちが働いているのに、わたしがなぜ入れないというのか。大丈夫だ、入らないくらいなら何のために来たのか。われわれの大事な労働者たちが働い

ている所ならいくら遠く険しい所でも行ってみなければならない。鉱夫たちを訪ねて来たわれわれが切羽にも入らず帰るなら、彼らがどんなに寂しがることだろう。わたしのことは心配せず入ろう……

総書記は質素な萩(はぎ)製のヘルメットをかぶり鉱夫用の坑内電車に乗って切羽へ向かった。

坑内電車が切羽に到着するや、鉱夫たちは歓呼の声をあげて一斉に駆け寄ってきた。総書記はご苦労だと彼らに声をかけ、労をねぎらい、一人ひとりの手を握った。

年配の鉱夫の一人が前に進み出て「こんな険しいトンネルまで……」と言って後の言葉をつげられず肩をふるわせた。

総書記は言った。

「切羽で働く鉱夫のみなさんに会いたくて来たのです」

妙香山の登山コース開拓

1981年5月、金正日総書記は中央の幹部たちで踏査団を組み、妙香(ミョヒャン)山の登山コースを新たに開拓することを決心して登山の途についた。

案内を受け持った幹部が道はかなり険しいと言った。

総書記は、かまわない、登山というのは険しい道を登る面白みがあるからするものだと言って足を運んだ。

一行が武陵(ムルン)滝に行き着いた時だった。急に空がかきくもり、雨

が降りそうになった。幹部たちは総書記に、登山コースを定めたのだからこれで下山しようと言った。

総書記は、天気は少々悪いがかまわない、最後まで登ろうと言って引き続き先頭に立って一同を促した。

八潭(パルタム)を眺め、危うげな釣り橋を渡って遊仙(ユソン)滝の上方にある水辺にたどりついた時雨が降りだした。

それからのコースは斜めに傾いている岩の下を這うようにして抜けなければならないうえに、その狭い道は雨にぬれてつるつるしていた。そして向かい側の岩もひびが入って今にも崩れ落ちそうに見えた。

幹部たちは総書記の前に立ちはだかり、引き返そうと強く引き止めた。

しかし総書記は微笑をたたえ、これくらいの天候で何をそんなに心配するのか、山に登れば雨にうたれるくらいは覚悟しなければならない、岩の下をくぐるのも登山の面白みだと言って話し続けた。

―― わたしのことを心配してくれるみんなの気持ちはよく分かる。だが踏査は続けよう。われわれは遊びにきた訳ではない。このように雨が降る日に登山コースを歩いてこそ登山路をしっかり確かめることができる……

一行がとうとう飛仙(ビソン)滝まで来た時雨は止み、数十メートルの断崖から流れ落ちる滝の白い水しぶきを背景に7色の虹が出た。

一同はやあ！と一斉に歓声をあげた。

この日、総書記は幹部たちに踏査の所感をたずねた後、登山コ

ースは急傾斜で安全施設が不十分なので事故の恐れがある、安全で便利なように整備するようにと話した。

五聖山の151曲がり

1998年8月のある日、金正日総書記は最前線に位置する五聖(オソン)山を訪ねた。

標高1000メートルを越すその山は、そびえ立つ断崖と深い渓谷からなっていた。敵の軍営は目と鼻の先にあった。

総書記が五聖山に登ろうと言うと幹部たちが押し留めた。

「最高司令官同志、豪雨で峠道が洗い流され、ところどころ陥没して登れそうもありません。道路を修理してから登ってください」

「今回だけはわたしたちの願いを聞き入れてください」

彼らの哀願するまなざしを見つめていた総書記は険しい峠道を見上げた。

「ありがとう、わたしを思うあなたがたのその気持ちが……」

総書記は高地に人民軍の軍人たちがいるのに、ここまで来て、高地に行かなくてはいけない、最高司令官がきょうのような悪天候の日に前線の険しい峠道を歩んでみなければ兵士たちの生活を知ることができない、と言って、決然と車に乗るのだった。

車は高地の頂点にある前方指揮所へ向かって走り出した。峠道は151曲がりであった。

激しい暴風雨で道端の草は根こそぎにされ、逆巻く濁流に洗われてあらわな石だけ残った道を進むと、車は大きく揺れた。

下方を見下ろすと険しい断崖だった。

みんなが手に汗を握っている時、いきなりバーンという音がしてとがった石を踏んだ車のタイヤが破裂した。スペア・タイヤに取り替えて車はまた前進した。

そうしていくつかのカーブを曲がった時だった。急に車が傾いたかと思うと、崖ぶちにすべり落ちかけた。背筋がぞっとする瞬間、運転手がハンドルを回転させて車は幸いにも道路上に戻った。危険きわまる瞬間だった。

総書記は何事もなかったかのように、後ろの車が見えないと心配した。

車は山の中腹に登りついた。

その時またもタイヤが破裂する音が鼓膜を打った。

汗みずくになった運転手が素早く飛び下りてタイヤを交換した。もうスペア・タイヤは1本しか残っていなかった。

再び山頂に向かって進んでいた車が車輪を空転させて滑り降りはじめた。

事態が容易でないと見てとった総書記は車から降りて車体に肩を当てて力いっぱい押した。随員たちも加勢して車を押し上げた。辛苦の末にとうとう151曲がりを回りに回って前方指揮所に到着した。

「ご苦労様です。前線でさぞ苦労が多いことでしょう」

泥水のはねた総書記の服装を見た部隊の指揮官たちは迎接報

告もできず、目頭を拭うのみだった。
　しばらくして指揮官は涙声で言った。
　「敬愛する最高司令官同志、ここがどこだと思ってこんなところまでおいでになったのですか……」

雪だるまになった車

　2001年12月24日、最前線の中隊の中でも一番遠く道が険しいところに駐屯していた一中隊の兵士たちは、うれしくもあり驚きでもある事実に目をまるくした。
　昨夜30センチもの大雪が降って道が全部閉ざされてしまったのに、金正日総書記が突然中隊に現れたのである。
　一瞬茫然とした兵士たちはどっと歓声をあげて総書記を取り囲んだ。
　総書記は明るい笑顔で兵士たちを見つめて、わたしはきょう、祖国の最前線を守って一番苦労している軍人たちに会いたくてやって来ました、と言った。
　兵士たちは、総書記がこのひどい雪の中をどのようにして来られたのかと不審に思わざるを得なかった。
　総書記が中隊を去った後、幹部の一人が兵士たちにこんな話をした。
　総書記はこの中隊を訪ねる前にまず軍人たちが建設したある発電所を訪れた。

まだ夜が明けきれず、周囲は一面雪野原なのに、突然2条のライトの光が暗がりを分けて発電所に近づいて来た。

発電所に来ていた幹部たちは驚かざるを得なかった。

確かに車は車なのだが、形は分からず、ただ白い雪だるまが転がってくるように見えた。近づいて来た時やっと見えたフロント・ガラスがなかったら、完全に雪だるまだった。

車に近寄った幹部たちはその場に立ちすくんでしまった。

車から降りてきたのは総書記だったのである……

深い感動に包まれている中隊の兵士たちに総書記の言葉が伝えられた。

「実は今回もなかなか時間が割けなかったが、年末になると最前線を守っている兵士たちがわたしを待っているような思いがして、きょう午前1時過ぎに寝床につき、4時に目を覚ましてここに向けて出発しました。外は真っ暗で雪が降り積もり道は険しかったが、最前線に向かって走るわたしの心はとてもうれしく軽やかでした」

忘れえない「滝あび」場

2008年8月のある日、一軍部隊を訪れた金正日総書記は、中隊の寝室や洗面場、食堂、食品倉庫などをすべて見て回り、中隊が自力で建設した発電所のダムにも足を運んだ。

流れをせき止めて谷間に積み上げたダムからは白いしぶきを

上げて水が流れ落ちていた。

中隊では軍人たちが訓練の合間に水を浴びることができるように「滝あび」場を設けていた。

そのことを聞いた総書記は、今のように暑い夏に軍人たちがここに来て水浴びをすれば喜ぶはずだ、ダムからあふれでる水を効果的に利用していると賞賛した。

総書記は灌水浴場が気に入ったと言ってこうたずねた。

「魚はいるのかね」

「いません。これから魚を入れて飼うことにします」

「いや、軍人たちがきれいな水を浴びられるように絶対にそうしてはいけない」

水浴びをしてさっぱりした気分になる兵士たちを思い描くように立ち尽くす総書記の襟首は、汗でぐっしょりぬれていた。

真夏の蒸し暑さ、照りつける太陽のもと大地を熱く焦がしそよ風もなく、樹々の葉もしなび、鳥も水辺に寄って涼むという暑さの中で、休むひまもなく現地指導の道を歩み続ける総書記の労苦はいかばかりであろうか。

中隊を後にした総書記はその心境を打ち明けるのであった。

―― 今も「ドロノキ」中隊の「滝あび」場がありありと目に浮かぶ。全身汗みずくになって、水しぶきを上げて流れ落ちる「滝あび」場を見ると、今にも飛び込んでみたい気持ちにかられた……

しかしその時、総書記は現地指導のため次の目的地へ向かっていた。

東に西に縦横無尽

誰もが驚きを禁じ得なかった。

土曜日の新聞と放送を通じて金正日総書記が東海地区の咸鏡南道を現地指導したニュースを聞いたのに、1日おいた月曜日の新聞、放送では総書記が西北部の楽元（ラクウォン）を訪れたというニュースを伝えたのである。

── 東に西に縦横無尽、まったく総書記の現地指導は一行千里、パルチザン式だ！……

本当にそうであった。総書記は2009年2月6日の夜遅くまで咸鏡南道への現地指導を終え、その足で列車に乗り、東海地区から国の西北端に向けて400余キロを走り2月8日、日曜日に楽元機械連合企業所の構内に到着したのであった。

ここに来て3カ月しか経っていないが、大型酸素分離機を製作することが重要な問題となったので、咸鏡南道の工場、企業に対する現地指導を終えるやいなや真っすぐここに来たと言う総書記の顔には長い旅路で積もり積もった疲労の色が歴然としていた。

（大型酸素分離機がいくら緊迫しているとはいえ、自分の体は少しも気づかわず、遠い道のりを走って日曜日に来られるとは？！……）

企業所の幹部たちは一言も発することができなかった。

楽元機械連合企業所の幹部たちと挨拶を交わした総書記は、即

座に酸素分離機工場の生産工程を見て歩きながら切々と言った。

―― 興南肥料連合企業所の肥料生産工程を近代化できるかどうかは、酸素分離機を期日内に製作して送れるかいなかにかかっている。みんなも知っているであろうが、興南肥料連合企業所を近代化してこそ肥料問題が解決されるのだ……

どんなことがあっても総書記が意図するその日までにりっぱな酸素分離機を作って興南に送り届けるという企業所責任幹部の誓いを聞いた総書記はこう言うのだった。

「楽元機械連合企業所でわたしがきょう与えた課題を確実に実行するというのですから、酸素分離機の問題でもう心配しなくてもすみそうです」

数えてみた列車の本数

ロシア連邦への歴史的な訪問の途についた金正日総書記が長い列車行軍を続けていた2001年7月のある日であった。

食事の時間も忘れて執務に没頭していた総書記は、昼食時間もかなり過ぎてやっと食堂車両に姿を現した。車窓の外を眺めている一人の幹部を目にした総書記は、何をそんなに考えているのかと聞いた。

幹部はあわてて挨拶をし、前日総書記から与えられた課題の実行方途を考えていたところだと答えた。

総書記は、幹部は何事においても深く考え、手落ちはないかを

具体的に検討してみるのはよいことだと言った。

そして一緒に食事をしようと言ってその幹部を横に座らせ、ハッサンからここに来るまで数日間どんなことを考えたかと聞いた。

幹部はすぐさま答えることができずためらった。そしてこう答えた。

「シベリアの大地は本当に広大だということと、ロシア人民がこの大陸横断鉄道を建設するのにさぞ多くの苦労があっただろうということです」

総書記は軽くうなずき、自分はそういうことより現実的な問題を考えたと言ってこう述べた。

「わたしはロシア連邦に入った時から、われわれが乗った列車とすれ違った列車がいくつかを数えてみました。……昼間は車窓の外を見ながら数え、夜間は列車がすれ違う音を聞いて数えました。その過程で列車の編成はどうなっており、列車に積まれた貨物量はおよそどれくらいなのかを推算してみました。疲れて少し横になる時には他の人に数えてもらいました」

低い声ではあったが、総書記の言葉は幹部の胸を強く打った。

総書記は感動した彼に、われわれが列車に乗って長い時間シベリアの大地を通過しながら何も考えることがなかったなら、ロシアを知るよい機会を逃しただろう、事象に対応する時何でも見すごすことがないようにすべきだと諄々とさとした。

総書記が断行した歴史的なロシア訪問の重要性と意義からすれば、シベリア鉄道を通過する列車の本数などは実際にはあまり

にも些細なことだと言えた。

しかし総書記はそれら列車の振動音一つもないがしろにせず、経済発展における鉄道輸送の役割を深く把握し、朝鮮の鉄道運輸を発展させるための思索にふけっていたのである。

列車と家

朝鮮人民が強盛国家の建設で新たな革命的高揚を起こし総突撃戦を展開していた2009年9月のある日、金正日総書記は幹部たちに再び熙川（ヒチョン）発電所の建設現場を視察すると言った。

幹部たちは、全国の人民に強盛国家建設の跳躍台をもたらすため150日間戦闘を繰り広げることを呼びかけたその日から、いっときの休息もとらず現地指導の強行軍を続けてきた総書記の健康を気づかい、「遠く険しい熙川発電所の建設現場へ行くことだけはおやめください」と言った。

すると、総書記はこう答えた。

── わたしは現地指導に向かうたびに、人民軍軍部隊にはわたしの兵士たちがおり、工場や農場にはわたしの人民がいると思うと、その道が骨の折れる道でもうきうきした気持ちで出発できる。熙川発電所の建設現場にもわたしの兵士たちと人民がいると思い、彼らを訪ねて現地指導の途につくのである。わたしは兵士たちと人民を訪ねて遠く険しい道を歩むことを大きな誇りと思っている……

この時、幹部の1人がこう言った。

「将軍が今年列車に乗って現地指導をなさった距離はこれまでの10年間の列車行軍の距離に相当します」

幹部たちは口をそろえて、あまり無理なさらず健康を気づかうよう哀願した。

総書記はこう言うのだった。

―― 今はもう列車に乗って移動し、車内で過ごすのが習慣になったせいか、列車に乗れば家にいるように感じ、反対に家に帰ると旅館に来たような感じがする ――

4　愛

潮干狩りをしていた少女

　ある冬の日、朝鮮西海の海辺で潮干狩りをしていた1人の少女が失踪したことがあった。

　少女は村人と一緒に引き潮どきに潮干狩りに行ったのだが、1人離れて貝をとっている間に夕暮れになり、低い潮路にそって寄せてきた満ち潮のため陸地に戻ることができなくなってしまった。日はとっぷりと暮れ、少女は氷板に乗ったまま海の彼方に押し流されていった。

　陸では村人がたいまつを掲げ、のどをからして少女の名を呼び、救助の船も出したが、真っ暗な海では何も見つけることができなかった。

　この事件について報告を受けた金正日総書記は、直ちに緊急救助作戦を発動した。人民軍のヘリコプターを動員し、党中央委員会の幹部を現地に派遣する一方、周辺の軍部隊と警備隊まで総動員する非常措置を講じた。1人の生命のために空中と海上、陸地で大規模の救助作戦が展開された。

　しかし、暗闇の荒海で少女を見つけ出すというのは不可能なことであった。遭難者を見つけ出せないまま長い冬の夜が明けた。

　随時状況を報告させていた総書記は、必ず救助しなければなら

ない、救助できなければ報告するなと厳命を下した。

救助作業を開始してまる20時間経った時、ヘリコプターから「目標発見！」という無電が入った。

ついに海に漂う氷板の上の少女を発見したのである。

少女は直ちに病院に運ばれ、集中的な救急治療を受けて意識を取り戻した。

このニュースを聞いた少女の家族は言うまでもなく、海辺に集まったすべての人たちは抱き合って歓喜の声をあげた。

少女が救助されたという報告を受けた総書記は、安堵の胸をなでおろし、執務に取りかかった。

3人の炭鉱労働者のために

1975年8月のある日、金正日総書記は北辺のある炭鉱で3名の労働者が思いがけない事故で瀕死の重傷を負ったことを知った。

患者の症状は絶望的だった。全身3度の火傷、完全ショックの状態、蘇生不可能……

その日の夜、総書記はある幹部を呼んだ。

「あなたは上和（サンファ）青年炭鉱の炭鉱夫の生命が危ういということを知っていますか」

「はい、報告を受けました」

「なぜわたしにすぐ報告しなかったのですか」

「ご心配なさるかと思って……」

「それは正気で言っていることですか。炭鉱夫の命が危ないというのに、わたしが心配するしないが問題になりますか。炭鉱夫の命を救うことより重要なことがどこにあるというのですか」

「申し訳ありません」

「それでどんな対策を立てたのですか」

「道党に電話で対策を立てるよう強調しました」

怒りのあまりしばらく口もきかなかった総書記は厳しく叱責した。

── わたしはあなたたちに人間に対する熱い心をもたねばならないと何度も強調した。ところがあなたたちはいつになったら正気になるのか分からない。炭鉱夫たちの命は寸刻を争うというのに、道党と保健部に緊急対策を立てるよう電話をかけるくらいでどうするというのか。人民はわが党を母なる党と呼んで慕っているのに、あなたたちに一体母親らしい気持ちが少しでもあるのか……

幹部は顔を上げることもできなかった。

総書記は即座に、至急炭鉱夫たちを蘇生させる非常対策を立てるとして、有能な医師と非常薬品をすべて動員し、夜は更けたが今すぐ飛行機を飛ばすようにと指示した。

「分かりました」

しかし、あいにくの豪雨のため民間機は飛ぶことができなかった。

総書記は直ちに軍用機を飛ばすよう命じた。

こうして軍用機が夜空に飛び立った。

その後、患者たちの体のむくみが取れず苦しんでいるという

報告を受けた総書記は、心配してこう言った。

―― 患者の体がむくんでいると聞いた。むくみを取るにはスイカとビールがよいそうだ。彼らに医薬品と一緒にスイカとビールを送り届けよう。ヘリコプターで医薬品とともにスイカとビールをきょう中に送り届けなさい……

総書記が講じた緊急対策によって、患者たちは回復期に入った。

総書記は彼らを完全に回復させるためには、近代的な医療設備を備えた大きな病院に移して集中的な治療を施す必要があるとし、再びヘリコプターを差し向けるよう指示した。

救われた三つ子

1994年7月初、朝鮮の北と南を分ける軍事境界線付近の山村で三つ子が生まれた。

産婦は将校の妻だった。

出産当日に医療陣が駆けつけて対策を立てた。しかし、三つ子の体の具合はかんばしくなかった。中でも体重の一番少ない3番目の病状がいっそう悪化した。

生まれはしたが、赤子たちはこの深い山村で生き帰らせることができるだろうかと村人たちは心配した。雨が降りつづき道がぬかるんで足止めされ、日が経つにつれて医療陣も三つ子の生命を危うんで焦燥感にかられるようになった。

けれども希望は失わなかった。三つ子が多く生まれるのは国が

栄える兆しだといって喜ぶ金日成主席の意を体し、三つ子が生まれればみな平壌産院に入院させて治療を受けられるようにする金正日総書記がおられるのだから、やがて空が晴れれば飛行機で産婦と三つ子も平壌に送られるものと信じていた。

いつ空が晴れるかと、人々は空を見上げていた。

ところが空はますます暗くなり、雷鳴がとどろき、篠(しの)突く雨が降りだした。そんな中で青天へきれきのように金日成主席が急逝なさったという悲報が伝えられた。

保育器を見守っていた医師たちは声をあげて痛哭し、産婦も卒倒してしまった。

三つ子について口にする人はいなかった。その存在はまったく忘れられてしまったかのようであった。

ところが7月12日、人々をびっくりさせる命令が電話と電信によって関係部門の幹部たちに伝えられた。

・朝鮮人民軍空軍部隊は重態に陥った産婦と三つ子の搬送のため即時金化郡(キムファ)昌道里(チャンド)への緊急飛行を手配すること。

・平壌産院は技術担当副院長を責任者とする強力な医療陣を現地に派遣すること。

・平壌空港では天候に関係なくヘリコプターを着陸させる徹底した安全対策を立てること……

全人民が慟哭し、山河が血涙に浸されていた時に、どうしてこういう命令が下ったのだろうか。

金正日総書記の命令であった。

誰よりも大きな喪失の痛みに耐えていた総書記が三つ子の運

命を案じて、どうあっても彼らをヘリコプターで平壌産院に搬送して蘇生させよという命令を下し、ヘリコプターは直ちに暴雨を突いて飛び立った。

産婦の家族と村人、軍人、老若男女がヘリコプターを取り囲んで感激の涙を流した。

三つ子を乗せたヘリコプターは空に飛び立った。

彼らは155日ぶりにみな健康な体で平壌産院から退院した。

兵士の防寒衣

1996年2月の末、最前線に位置する351高地を視察していた金正日総書記は、2名の兵士の防寒衣をじっと見つめていた。

総書記が防寒衣の綿が薄いのではないかと聞くと、兵士の1人が勤務の時は毛皮のシューバを着るので大丈夫だと答えた。

けれども総書記は首をかしげ、兵士たちの防寒靴も押さえてみて、靴の綿も薄いと心配した。

そして、兵士たちが着ている防寒衣の縫い目を検べながら幹部たちに、縫い目からすきま風が入りそうだ、表まで針を通していない防寒衣の方が表まで縫い込んでいる防寒衣よりよさそうだ、生地が多少余分にかかっても軍人たちが寒がらないようにしなければならない、と言うのだった。

寒さの厳しい高地に長い間留まっている総書記を心配して、指揮官たちは下山するよう促した。

「兵士たちが寒がっているのを見ると離れがたい。下りる気にならない」

総書記は顔をくもらせ次のように語った。

「あなたがたはよいオーバーを着ているから寒くないかもしれないが、兵士たちはそうではない。将校のために兵士がいるのでなく、兵士のために将校がいるのです。指揮官は兵士のための指揮官にならなければなりません」

慈愛のライト

いつのことか前線視察の途についた金正日総書記の車が平壌――元山道路の途中のムジゲトンネルを通過した時のことだった。

トンネルの中間あたりまで来た時、車が急停止した。トンネルの補修工事に動員されていた軍人たちが小隊、分隊別にあちこちに位置を占めて食事をしているのを見た総書記が、彼らの邪魔にならないように停車させたのであった。

車のエンジンを止め、ライトも消した。

ところがトンネルの高い天井に吊るした電灯よりも車のライトの方が明るかったせいか、軍人たちはライトで照らしてくれと叫んだ。

随員たちはあわてて車から降りようとした。

総書記は彼らを制止し、われわれの車だと知ったら軍人たちが

驚くだろう、ライトで照らしてあげなさいと命じた。

車のライトが一斉にともされると、薄暗かったトンネルの中が真昼のように明るくなった。

軍人たちは笑いさざめいた。

かなりの時間が過ぎた。随員たちは出発するよう総書記を促した。

総書記はどうせのことなら食事がすむまでライトで照らしてあげなさい、今車が行ってしまえば軍人たちはこの暗がりの中で満足に食事もとれないだろう、ずっとライトで照らしてあげようと言うのだった。

後日、こうしてくれたのが総書記であることを知った軍人たちはただただ感激するのみだった。

わたしの息子、娘

1996年3月某日、金正日総書記は最前線に位置する大徳(テドク)山の陣営を訪れた。

ここは敵とじかに銃口を向け合っているところで、何かしら疑わしい動きがあっても彼我の間に弾丸が飛び交う危険きわまりない地帯であった。

けれども総書記は敵陣が一目で見渡せる監視所に登って兵士たちと記念写真を撮り、彼らに厚い恩情を施した。

随員たちは終始緊張し、胸を締めつけられる思いだった。

その日の夕暮れ、幹部たちは総書記に心から懇願した。

「何とぞ前線地帯だけは二度と行かないでください。これはわたしたちだけの願いではありません」

しばし幹部たちを見つめていた総書記は、あなたがたの気持ちは十分理解できる、それをありがたく思っている、と静かに言った。

そして、最前線の兵士たちを思い描くように遠い南方の空を眺めてこう言うのだった。

「今、最前線ではわたしの数多くの息子、娘たちが祖国の防衛線を守っています。わたしは前線で警戒勤務に当たっている息子、娘たちの勤務生活を確かめ、彼らを励まさなければならず、そのためには前線地帯へ行かなければならないのです」

わたしの息子、娘！

息子、娘たちを訪ねて行く父親の愛を誰が阻むことができようか。

労働者の世の中

1981年6月末、咸興市の現地指導に当たっていた金正日総書記は新しく建設された咸鏡南道口腔疾患予防院を訪れた。

総書記がある治療室に立ち寄った時である。

そこには最新鋭の総合治療台が設置されてあった。

総書記はこんなに大きくすごい歯科病院はまだ平壌にもない、多くの労働者が生活している咸興にこういう近代的な歯科病院を建てたのは本当によいことだと言って喜んだ。

随行した道の幹部が、この治療台は外国では大統領や君主のような元首クラスが専用にしている設備だと説明した。そして、この治療台を買い入れる時外国の専門家は、朝鮮ではこの設備をどうして地方の病院へ設置するのかと質問していたとつけ加えた。

総書記は大きな声で笑った。

「王様用だというのだね。……それは困ったことになった。朝鮮には王様がいないのだから……」

笑い声が起こった。

総書記は笑いながら言った。

「でも心配することはない。わが国では人民が主人なのですから、人民が利用せず誰が利用するというのですか。ほかならぬ労働者がここに座るべきです」

一同は笑いを収めた。笑って受け止めるにはあまりにも意味深い言葉だったからだ。

その後開院した咸鏡南道口腔疾患予防院の治療台は平凡な労働者、人民の治療に活躍した。

労働者たちに謝れ

2008年12月24日、寒い時期にチョンリマ製鋼連合企業所を訪れた金正日総書記は炉回り工の食堂にも立ち寄った。

食堂にはミネラルウォーターもあり、炉回り工のための栄養食のメニューも満足できるものだった。

ところがどうしたことか、総書記は顔色をくもらせた。

総書記は食堂の温度が低くて寒いと指摘し、こう言った。

「労働者が寒いところでいくら栄養価の高い食事をとっても無駄です。労働者が寒いところで食事をするのを見ながら対策を立てないのは大きな過ちです」

総書記の指摘を受けた幹部たちは自責の念にかられた。

すべてが不足がちで困難な時に、労働者たちに栄養食を供給しているだけでも大したものだと考え、食堂の温度については考えもしなかったのだった。

総書記は断固とした語調で続けた。

―― 支配人と党責任書記は労働者を集めて謝り、食堂の温度を正月までに正常な状態に上げなければなりません ――

その後、幹部たちは労働者の前で謝り、炉回り工たちは暖かい食堂で食事できるようになった。

消えた汽笛の音

1976年7月のある日のことであった。

白頭山の壮観な日の出を見た金正日総書記は、随員たちにここからすぐ内谷（ネゴク）温泉へ直行しようと言った。

随員たちはあわてた。

この足ですぐ内谷へ直行するとなると、総書記はまた朝食をとれなくなるからだった。

随員が三池淵（サムジョン）に立ち寄って朝食をすませてから出発してはいかがですかと言ったが、総書記はきょうは白頭山に登った日なのだから1、2食抜いてもどうということはないと言って言葉を継いだ。

── 駿足のあなたが先頭に立ちなさい。早く行って内谷温泉を見て回ろう。平壌に戻る前に人民のためによいことを一つでも余計にして行くのはよいことではないか。わたしのことは心配せずに早く行こう ──

そして、分析データによれば内谷温泉は各種の治療によい成分をもっている、そこに療養所を設け、人民が療養をしたり、白頭山に来た人が帰り道にひと休みして入浴できるようにすればそれに越したことはない、と語った。

こうして随員たちは朝食も後回しにした総書記を内谷温泉に案内せざるを得なくなった。

こんこんと湧き出る温泉に手を浸して湯の温度や量を確かめた総書記は周辺を見回しながら、この地区に近代的な療養所と文化厚生施設を設ける方途を一つひとつ示した。

その時だった。

丸木を満載した森林鉄道の列車が汽笛の音をかまびすしく鳴らして温泉村の中に伸びている線路を通過した。

静寂だった山村は列車の音でにわかに騒々しくなった。

列車が山ひだに消え去るまでじっと見つめていた総書記は、ここで療養させるためには静かでなければならないのに、線路があっては安静を保てない、森林鉄道の線路を他の場所に移すべきだ

と話した。

線路を移すとは……

一同は驚かざるを得なかった。

四方が山に囲まれている谷間から線路を移すためには山にトンネルをうがたなければならないが、その長さはざっと推算してみても400～500メートルになる。

総書記は、線路を移すことがいくら困難で複雑であっても、ここで休息や療養をする人民のために無条件で実行すべきだと強調した。

その後、内谷温泉のまん中を通過していた線路は遠くに移された。

かまびすしい汽笛の音は消え、人々の笑い声がこぼれるようになった。

ママのきれいな顔

2004年12月のある日、金正日総書記の前で1人の女性と2人の男性が頭を垂れて立っていた。

夢にも総書記に会うことを渇望してやまなかった彼らであったが、火傷の跡が歴然とした自分たちの顔を見て胸を痛める総書記を思うと頭を上げることができなかったのである。

彼らは不意に起こった山火事で、かつて抗日革命闘士たちが記したスローガン入りの樹々を守ろうとして全身に火傷を負った

のであった。

総書記は頭を垂れた女性の顔をまじまじと見つめて聞いた。

「どんな治療を受けましたか」

それでなくとも総書記に心配をかけてはならないと思っていた彼女は、のどをつまらせ答えることができなかった。

そばにいた幹部が、その間咸興整形外科病院と平壌医科大学付属病院で14回に渡って顔面手術を受け、かなりよくなった状態であることを説明した。

けれども総書記は3人の顔を痛々しい眼差しでじっと見つめて言った。

── まだこの人たちの顔と手にやけどの跡がかなり残っているのだから、外国へ送ってでも必ずもと通りになおしてあげなければなりません──

総書記の言葉に女性は涙にむせんだ。

彼女は心の中でこうつぶやいた。

（あまりご心配なさらないでください。もうなんでもありません）

事実そうであった。最初は人前に出るのが恥ずかしかったが、誰もが尊敬の眼差しを向けてくれたし、ある将校が訪ねて来て、人間の美しさは表ではなく心にある、一生をともにしようと言った時、彼女は次第に平静な気持ちになってきた。

結婚式の日、故郷の幹部が祝膳の前に座った彼女に、顔を上げなさい、あなたは火の中でも燃えない信念をもった偉い女性だと言った時、もうこれ以上やけどの跡のために心を痛めないように

しようと心に誓った。

ただ一つ、かわいい赤ちゃんが生まれた時、その子の瞳にママの見苦しい姿が映ったらどうしようと思った。けれどもその子も大きくなればママを理解し誇りとするだろうと思って自分を慰めてきた。

ところが、外国へ送ってでも必ずもと通りなおしてあげようという総書記の言葉を聞いて、こうした今までの思いが一度に浮かび上がり、わきあがる感動を押さえることができなかった。

総書記はむせび泣く彼らから目を離すことができず、この人たちの顔面手術を遜色なくしなければならない、この人たちにもみな子どもがいるはずだから、もと通りの顔を必ず見せるようにしてあげよう、と強調した。

1年後、もとよりもっときれいになった姿で祖国に帰って来た彼女は、迎えに来た2歳の娘を抱いてささやいた。

（ほら、将軍さまが取り戻してくださったママのきれいな顔をよく見てごらん……）

3・8国際婦人デーの「ポムヒャンギ」

2008年、3・8国際婦人デーの時のことである。

この日、東平壌（トンピョンヤン）大劇場は歓喜にわいた。

金正日総書記の発起により3・8国際婦人デーの祝賀公演が催され、平壌市内の最高人民会議女性代議員と女性同盟の幹部、女

性の作家、記者、アナウンサー、創作家、芸能人たちが招待された。

公演が終わった時である。

ある幹部が舞台に登り、総書記がすべての出演者と観覧者に贈り物をくださり、これからその授与式を行うということを告げた。

総書記を迎えて公演を観覧した無上の喜びと幸福感に浸っていた人々は、耳を疑わざるを得なかった。

公演に出演した人たちはそうだとしても、自分たちは公演を観覧しただけではないか。そういう自分たちにも贈り物をくださるとは……

高級化粧品「ポムヒャンギ」セットと各種の食料品が千数百名もの出演者と観覧者、それに女性だけでなく男性にも与えられた。

感激の声がホールにあふれた。

けれども人々は贈り物にまつわるいわれを知るよしもなかった。

数日前の深夜、総書記は新義州(シンイジュ)化粧品工場で「ポムヒャンギ」ブランドの化粧品をどれくらい余分に生産できるかを問い合わせた。そしてこう言った。

「新義州化粧品工場で『ポムヒャンギ』化粧品を1500セット明日まで生産できるというなら結構です。その化粧品を3・8国際婦人デーに使おうと思います」

総書記は重ねて電話をかけ、化粧品をトラックやバスで運んだのでは途中で損傷する恐れがあるから、列車で輸送した方がよいと指示した。

こうして化粧品を積んだ「特別列車」が平壌に向かった。

総書記は3・8国際婦人デーの当日、公演が始まる前に、幹部を呼んでこう言った。

── 化粧品のセットを男性たちにも配りましょう。そうすれば彼らの妻たちが喜ぶはずです……

生まれる前につけられた名前

2000年3月21日、金正日総書記が北部高原地帯の大紅丹（テホンダン）のある除隊軍人の家庭を訪問した時のことである。

「将軍さま、まだわたしたちの親も来ていないのに、将軍さまが先に訪ねてくださりました。本当にありがとうございます……」

感極まって挨拶する除隊軍人の夫婦に、総書記は、除隊軍人の新婚所帯にわたしが一番先に来たのはよかった、いつ結婚したのかと聞いた。

夫がてれて返答しかねていると、郡の幹部が、妻は平壌から娘時代に大紅丹にやってきた女性であり、昨年の建軍デー（4月25日）に結婚し、今は身ごもっていると話した。

それはおめでたい話だと言って、総書記はまた除隊軍人の妻に問いかけた。

「それで出産する月はいつなのかね」

「7月です」

「男の子を生めるだろう」

「必ず男の子を生みます」

親しみのこもった質問と闊達な返答。

父親と娘の間に交わされるようなこだわりのない問答だった。

男の子か女の子かも分からず、必ず男の子を生むという彼女の言葉を聞いてみんなが笑った。

総書記も大笑いした。

ところが急に彼女が総書記に何事かをささやいた。

笑い声が止まず総書記が聞き分けられずにいると、彼女は総書記の腕にすがってまた繰り返した。

「将軍さま、赤ちゃんに名前をつけてください」

あまりにもおこがましい願い事に一同の顔から笑いが消えた。

けれども総書記はいささかも意に介せず楽しげに言った。

「先に名前をつけようというのだね」

そしてまだ男の子か女の子かも分からないのに名前のつけようがない、あとで名前をつけてあげようと約束した。

その日の晩、総書記は除隊軍人の家庭に立ち寄ったことを幹部たちに想起させ、もともと子どもの名前は父親がつけるものだが、除隊軍人の妻のたっての所望だから、彼らの未来を祝福する意味でわれわれが名前をつけてあげようと言うのだった。

「男の子を生めば大紅(テホン)、女の子を生めば紅丹(ホンダン)とするのがよさそうだ」

実に意味深い名前だった。二つの名前を合わせれば彼ら夫婦が総書記の意を体してジャガイモ栽培で革新を起こすため進出し

た「大紅丹」になるのである。

その後、その除隊軍人の家庭では「紅丹」が生まれた。

残された空白

1995年春のある日であった。

金正日総書記は満足した表情で文書を一枚一枚めくっていた。総書記が自ら編成した「柿の木中隊」女性海岸砲兵たちの平壌見学スケジュールだった。

何か不十分な点はなかろうかと何回も見直した総書記は、この女性兵士たちに今度写真を撮ってあげなければならない、と幹部たちに言った。

幹部の1人が、中隊が自分たちで写真を撮る準備をしてきたはずだと言った。

だが、総書記は違った考えをもっていた。

── たとえカメラがあるとしても、専門家が撮る写真と素人が撮る写真とでは違いがある。もしや操作を誤ってフィルムが駄目になったらどんなに残念がるだろう ──

総書記は有能なカメラマンを同行させて初めから終わりまで撮りたい写真を全部撮らせ、アルバムにして渡すのがよいだろうと言った。

平壌見学を終えて帰隊する準備をしていた女性軍人たちは、見学の途中で撮った写真をまとめた中隊の集団写真アルバムと個

人別のアルバムをそれぞれ受け取った。
　だが大喜びして第1ページをめくった彼女たちは首をかしげた。誰のアルバムもみな1ページは空白になっていたのである。
　（？！……）
　彼女たちの目は申し合わせたようにアルバムを持ってきた幹部に注がれた。
　幹部はその訳を話した。
　アルバムを総書記に持っていった時である。
　きれいに装丁されたアルバムを開いて見た総書記は、単独写真の第1ページを開いたまま何かしら考えていた。
　幹部たちが訳が分からず立っていると、総書記は第1ページは空白にしておいてはどうかとたずねた。
　（空白に？！……）
　いぶかしがる幹部たちに総書記は、後日彼女たちが除隊すれば嫁いで結婚の記念写真ができるはずだから、残しておいた第1ページの空白にその写真を差し込めば意義深いものになるだろうと言った。
　その訳を聞いた女性兵士たちはアルバムに顔を埋めてむせび泣いた。
　「お父さん！」

愛は障壁を越えて

1984年8月31日、この日の夜も季節外れの長雨が降り続いていた。

現地指導の途上にあった金正日総書記は、宿所の窓辺に立って南方の空をいつまでも眺めていた。

そして幹部たちに、こんな雨では南の同胞が心配だ、こんなに降り続いては南朝鮮は間違いなく洪水になる、洪水になれば人民が苦しむではないかと言った。

そして次のように話した。

「夜が更けると恋しさが増すようです。南朝鮮人民のことを考えると心が苦しくなります。祖国の分裂のためになめている南朝鮮同胞の不幸はわたしの心を痛めつけます」

こう言って激しく降りしきる雨を心配そうに見つめた。

総書記が憂慮したように、ソウルをはじめ南朝鮮各地では前例のない大洪水に見舞われた。350余名が死亡し、20万7000余名が被災し、生き残った人々はもどかしく救いを求めていた。

こうした事実について報告を受けた総書記はその晩食事をとることができなかった。

総書記は幹部を呼び、被災民のことを考えるとご飯ものどにつかえそうだ、どんな措置をとればよいか早急に検討してみるようにと命じた。

こうして平壌では南朝鮮の被災民に救援物資を送ることが決

定、発表された。

総書記は救援物資がいくら多くても惜しむことはないとし、何と言おうと民族が一番だ、助ける人はわれわれしかいないから一つひとつ選んで最上のものを送らなければならないと強調した。

この熱い同胞愛によって、朝鮮が分裂して以来初めて、5万石の米、50万メートルの織物、10万トンのセメントと多量の医薬品が分裂の障壁を越えて南朝鮮人民に送られたのである。

「セッピョル」

1990年11月のある日、金正日総書記は1通の手紙を受け取った。

朝鮮に来て活動しているキューバの語学専門家夫婦が寄せた感謝の手紙だったが、そこには平壌産院で生まれた自分たちの息子の名前をつけてほしいという内容が記されていた。

この夫婦が手紙を出すことになったのは特殊なわけがあったからである。

朝鮮に来て翻訳出版関係の仕事に携わっていた夫婦には、結婚後8年になっても子宝に恵まれないやるせなさがあった。

朝鮮滞留中婦人は再度懐妊して平壌産院に入院した。しかし喜びとともにまた不安も大きかった。これから3カ月して滞留期間が切れて帰国することになれば、習慣性になっている流産をしかねなかったからである。

夫婦の顔には憂いの影が差した。

こうしたことについて報告を受けた総書記は、滞留期間が過ぎても彼らが残留して平壌産院で出産できるようにした。

やがてキューバの女性は無事男の子を生んだ。

感激した夫婦は総書記に感謝の手紙を送った。そこには男の子の保護者となって朝鮮式の名前をつけてくれることを願う気持ちが切々と書かれていた。

総書記は外国人夫婦が初の子を得たことを大変喜び、その子の名前を「セッピョル（明星）」とするのがよいだろう、「セッピョル」はどこからでも見られる星だと言った。

そして「セッピョル」に服地、ベビー服、おくるみ、それに練乳、砂糖などの贈り物も届けた。

赤子の名前とともに恩情のこもった贈り物まで受け取った夫婦は感激してやまなかった。

こうした話はキューバの「セッピョル」に限られたものではない。パレスチナの「チンダルレ（つつじ）」、中国の「雪光」にもそのようないわれがある。

よみがえった『乙女の春』

2008年7月のある日であった。

朝鮮を訪問中のロシア「ベリョズカ」舞踊団の公演を鑑賞した金正日総書記は、彼らの公演成果を高く評価した。

舞踊団指揮メンバーや俳優たちと会見した総書記は、コルツォ

ーバ団長がソ連当時制作された劇映画『乙女の春』のヒロインを演じたことを回想し、テレビでその映画を放映するから、平壌に滞在している間に観ていくようにと言った。

コルツォーバはびっくりした。

ひところ広く上映されたが、社会主義の崩壊とともに消え去ってしまった映画、自分がヒロインとして出演したということを覚えている人もさほどおらず、自分自身も過ぎ去った昔日の思い出としていたことを総書記が『乙女の春』とともによみがえらせてくれるとは夢にも思わなかった。

総書記の話を聞き、彼女は数十年前の乙女の春に舞い戻ったような幻覚にとらわれた。

平壌のテレビでは実際に彼女の娘時代の姿が映し出された。彼女は2回も放映された『乙女の春』を観て夢を見ているような気持ちにとらわれた。

再び総書記に会った時、コルツォーバは涙を押さえることができず、数年たてば齢70になるが『乙女の春』のヒロイン役を演じた時のように思っていただきたい、自分は今も共産党員証を持っていると言った。

その後、コルツォーバはロシアの民族文化の伝統を守るために努めており、毎年のように舞踊団の団長として朝鮮を訪れている。

5　道　義

尊敬する教師

「終生回顧しうる師がある人は、たしかに幸せな人である」

これは金日成主席の回顧録『世紀とともに』に見られる至言である。

生前、主席は折に触れ吉林毓文中学校の語文学教師であった尚鉞先生を追憶した。

金正日総書記にも、数十年の歳月が流れても忘れられない師がいた。

1995年1月の初め、幹部から金日成総合大学の活動について報告を受けていた総書記は、同大学のある教授のことを話した。総書記は、彼は経済学部で一番実力のある教授の1人だ、この前テレビにも出ていたが、だいぶ老け込んだようだったと言った。

そして、今では白髪が目立つ教授の顔を思い浮かべるかのように感懐にひたり、彼はわたしが尊敬する教師ですと言った。

感動にひたっている幹部に視線を向けた総書記は、自分も人間だ、人間なら当然自分の師を尊ぶべきだと語った。そして、新年に際して彼に金日成主席の尊名入りの金時計を贈ることにしよう、君が贈り物を伝達し、わたしの挨拶も伝えるようにと指示した。

数日後、金日成総合大学では総書記の贈り物の伝達式が盛大に行われた。

老教授は涙ながらに万歳を唱え、真情を吐露した。

「昔から次代のためにろうそくの火のように情熱を燃やす人を師と呼んできましたが、金正日将軍は全国の人民をその懐に抱いて見守り育ててくれる慈父、偉大な師です。偉大な師の追憶の中に生きる教育者であるわたしはこの世で一番幸せな人間です」

手術に立ち会う

ある年の秋日、一人の抗日革命闘士が病院に運び込まれた。

容態は絶望的だった。癌性疾患だったのである。これといった治療対策はなかった。唯一の方法は直ちに手術をすることだった。

患者の命を救う方法が外科療法しかないのなら思いきって手術をするようにという、金正日総書記の指示により手術することになった。

ところが、思いがけないことが起きた。

脈搏数をはじめ、患者の体の数値がみな正常値を外れていたのである。この状態で手術をするのは危険だった。医師たちはうろたえた。

この時だった。

「やはりわたしが家族と党中央委員会を代表して手術に立ち

会うことにします」という太い声が聞こえたかと思うと、総書記が手術室に入ってきた。

総書記は老闘士のそばに歩み寄り、「大丈夫です。気を楽にしてください。わたしが立ち会います」と言った。

そして、彼の両手を握って言葉を続けた。

── 苦しければわたしの手を握ってください。わたしは手術が終わるまでずっとここに座っていますから ──

彼は危地で母親に出会った子どものように、総書記の手を握って離さなかった。そして、安心したかのようにゆっくりと目を閉じた。

刻一刻と時間が流れた。

そのうちに不思議なことが起こった。不規則に上下していた患者の体の数値がみな正常に復しはじめたのである。総書記が立ち会っていることが患者に安心感を与えたのだった。

直ちに手術に取りかかった。2時間の予定だった手術は5時間もかかった。

その間、総書記は一度も手術台を離れることなく患者の手を握りつづけていた。医師たちと同様に総書記も汗みどろになっていた。

生死の境をさまよっていた患者は生き返った。

しかも、この話はこれが終わりではない。

後日、老闘士は二次手術のために外国へ発った。

二次手術も成功した。手術後、5カ月にわたって治療を受け、健康を取り戻した老闘士は総書記が送った特別機で帰国した。

総書記に報告する前に着替えなければならないと考え、彼が自宅に立ち寄ると、思いがけなく総書記が玄関で待っていた。

体の具合はどうか、別状はないかと聞いた後、総書記は、空港へ行こうとしたが、久方振りで帰ってくるあなたを家で迎えてくれる者はいないのではないかと思い、ここで待っていたと語り、こう言った。

「……祖国で一次手術をした時はわたしが立ち会いましたが、外国で二次手術をした時には立ち会うことができませんでした。その代わり、その時刻にわたしは祖国で手術の状況について報告を受けました。……わたしの記憶に間違いがなければ、あの時の体温は37度6分の微熱だったはずです」

結局、総書記は二次手術にも立ち会ったことになる。

涙を見せたことがないと言われていた老闘士の目がうるんでいた。

豪雨をついて

1981年5月のある夜、地方のある宿所で金正日総書記は、シム・チャンワン同志が心臓麻痺で死亡したという知らせを受けた。

総書記は驚愕した。

彼は、総書記とともに妙香山の登山コースを切り開くにあたって、人民にこの名山の景色を満喫させようとする総書記の構想を実現するために先頭を駆けていた「斥候兵」であった。

彼が倒れたのは登山コースの最後の地点だった。

総書記は彼の頭を自分の膝に乗せて、**「チャンワン、しっかりしろ。早く目を開くんだ！」**と叫んだ。

彼は直ちに平壌へ送られた。

車を見送った総書記は気が気でなかった。自分は死んでも将軍のそばを離れないと、彼が口癖のように言っていたことも思い出した。そして、食事もとらずに平壌から朗報がもたらされるのを心待ちにしていたのである。

あのシム・チャンワンが亡くなるとは？！……

窓の外では雨が降っていた。風が吹くたびに、空高くそびえる大木からしぶきが四方八方に飛び散った。

総書記は詰め襟のホックを外して窓を開け放った。しきりに雨が降りかかったが、総書記は窓辺に立ちつくしていた。そして、まんじりともせず一夜を明かした。

早朝、ある幹部が部屋に入ると、総書記は、きょうはスケジュールをみな取り止めて平壌へ行こう、シム・チャンワン同志の葬儀に参列すればわたしの気持ちも少しは晴れるだろうと言った。

幹部はうろたえた。昨夜来の豪雨のため鉄砲水が出て河川が氾濫し、平壌へ通じる橋も水につかってしまったのである。

「将軍、発つのは明朝に延ばすしかありません」

「それはなりません。必ず行かなければなりません。シム・チャンワン同志が眠っているではありませんか。迂回路がないか問い合わせてみなさい」

「迂回路が一つあるにはあるのですが、そこへ行くには鉄橋を

渡らなければなりません」

「それなら、その鉄橋を渡りましょう。あれほど党に忠実であった革命戦士が倒れて眠っているというのに、生きているわれわれが鉄橋を渡れない訳はない。早く行きましょう」

こうして総書記一行は宿所を発った。4〜5キロほど行くと小さな鉄橋が見えた。

随員たちは鉄橋の上から川を見下ろし、思わず後ずさりした。眼下には水位を増した濁流が大きな渦を巻いていたのである。

彼らは「だめです、引き返しましょう」と立ちはだかった。

しかし総書記は、大丈夫だ、あわてずにわたしのあとに付いてゆっくり渡るのだと言い、先に立って鉄橋を渡りはじめた。

随員たちは総書記が歩を移す枕木を見据えながら、手に汗を握って鉄橋を渡った。

ようやく橋を渡りきると、総書記は道を急いだ。

しかし、少し行くと道路が水につかっており、それ以上進めなくなった。水の上に見えるのは鉄道線路の土手だけだった。

総書記はためらうことなく平壌へ通じる線路の土手にのぼった。

どうしてそんなにあっけなく死んでしまったのか、人の運命というのは本当に分からぬものだと口走りながら、豪雨をついてまっしぐらに突き進む総書記の頬からはとめどなく涙が流れ落ちた。

こうして数里を歩いた時、遠くに車のヘッドライトの明かりが見えた。その時、時刻は午後10時になろうとしていた。

総書記が平壌に着いたその足で故人の霊前を訪ねると、彼はあたかもやすらかに眠っているかのようであった。

総書記は涙を流しながら何度も彼の顔を見た。

烈士たちを忘れてはならない

1998年9月のある日のことである。

前線視察の帰路、金正日総書記は平壌の近郊にある愛国烈士陵を訪ねた。

烈士たちの石造写真を順々に見ていた総書記は、**「ここに来ると忘れられない人たちにみな会える！　みな生きているようだ。石造写真はよく出来ています」**と大いに満足した。

そして、きょうは時間がかかっても烈士たちの顔をみな見ていこうと言い、段段になっている烈士陵の墓を一つひとつ見て回った。

ある烈士の石造写真を見ては、この人は革命武力の強化発展に大いに寄与したと述べ、ある烈士の石造写真を見ては、この人は首都建設をはじめ国の建設事業に大きな功労があったと評価し、あたかも彼ら一人一人と心の中で言葉を交わしているかのように石造写真に見入った。

党と革命に限りなく忠実な同志たちだった、働き盛りにあまりにも早く他界してしまったと思うと本当に胸が痛むと声をかすらせる総書記を見て、随員たちは熱いものを呑み込んだ。

多くの石造写真を一つひとつ見て回っているうちに、いつしか夕闇が迫った。

しかし総書記は引き続き墓を見て回った。

車のヘッドライトで照らさせて最後の墓まで見て回り、段段をおりていた総書記はふと立ち止まり、残念そうに言った。

「きょう愛国烈士陵を見て回ったところ、もれた人が何人かいるようです。党と領袖のために誉れ高い生涯を送った烈士たちをみな愛国烈士陵に安置すべきです」

そして、だれだれも最後まで革命に忠実であった、彼らをみなここに安置して石造写真もつくってあげよう、祖国の統一・独立と社会主義建設における彼らの偉勲をわが党と人民は永久に忘れないだろうと語った。

烈士陵から帰った総書記は、今回烈士たちの石造写真をつけたので陵がすっかり様変わりしたと満面に笑みを浮かべた。

そして幹部たちに、**「君たちもみな行ってみただろう？」**と聞いた。

「あのう、実は時間を割くことができず……」と彼らが言いよどむと、総書記は顔をくもらせた。

そして、愛国烈士陵に石造写真をつけたことを知っていながら、まだ行っていないのを見ると、君たちに革命的信義と同志愛が足りないようだ、われわれはつねに、祖国の解放と社会主義建設、国の統一偉業のためにたたかって倒れた愛国烈士たちを忘れてはならないとして、次のように言葉を継いだ。

── 朝鮮の革命家は革命的信義を命より重んじる真の人間だ。この気高い道徳的信義にもとづいてわれわれの一心団結がもたらされ、朝鮮革命の誇りに満ちた歴史が創造されたのだ。金日成同志が築いた革命的信義の伝統をりっぱに継承し発展させてい

るがゆえに、わが党が強く、朝鮮革命は必勝不敗なのだ……

恐縮している幹部たちに総書記はこう言った。

「みな愛国烈士陵に行きなさい。君たちが行けば先に逝った同志たちがどんなに喜ぶことでしょう」

帰ってきた人たち

歴史には次のような悲話がある。

ナポレオン軍がモスクワに攻め入った時、捕虜になった兵士たちがいた。戦後、ロシアはフランス当局に捕虜たちを引き取るよう通告したが、新たに政権を握ったブルボン王朝はそれを拒んだ。そして、フランスの捕虜たちは30年近くもロシアで監獄暮らしをした後、監獄跡で畑を耕しながら故国を思って涙を流した……

朝鮮にはこれとは正反対の感動的な話がある。

南朝鮮で数十年にわたって獄中生活を強いられながらも、信念を守りとおした60余人の非転向長期囚が一度に北へ送還されたのである。

世界の注目が集まる中、非転向長期囚の李仁模（リインモ）が北に帰還した翌年の1994年2月のある日のことである。

金正日総書記は関係部門の幹部にこう言った。

―― われわれは李仁模同志を連れてきたように南朝鮮にいるほかの非転向長期囚もみな連れてこなければならない。それで昨年彼らの姓名と住所をみな調べるようにと指示した。人類史に

30～40年も獄中闘争をしながら転向しなかった革命家の話は、わが党によって教育、育成された革命家のあいだにしかない。わたしは、非転向長期囚たちを連れてくることは、革命の道でわが党に従ってたたかった同志たちへの革命的信義であり、革命の指導者が戦士たちにささげるべき貴い愛情であると考えている……

その後、総書記は南朝鮮で苦労している非転向長期囚たちを片時も忘れず、彼らを帰還させるための措置を次々と講じた。

2000年6月、国の統一問題を論じる歴史的な北南首脳の対面の際にも、総書記の念頭にはつねに北へ帰る日を待ち焦がれているであろう統一愛国闘士たちのことがあった。

4時間にわたる単独会談が終わり、両首脳は車で宴会場であるモンラン館に向かった。車の中で金大中（キム デ ジュン）は、「離散家族」の問題だけは必ず解決してもらいたいと懇請した。すると総書記は、北は8・15（朝鮮解放の日）に際して離散家族・親戚訪問団として100人をソウルに送るつもりなので、南側でもそれくらいの規模で送ればいいだろう、その代わりに南側は非転向長期囚たちを送るべきだ、と答えた。帰りの車内でも総書記はこの問題について金大中に釘を刺した。

こうして、非転向長期囚の送還問題が6・15北南共同宣言に明記されることになった。

彼らの送還は既定の事実となったが、その後も総書記はこの問題に深い関心を払った。

総書記は関係部門の活動家たちにこう指示した。

非転向長期囚たちを連れてきたら最高の待遇をし、彼らを大い

に推賞し誇るべきだ……

それから数カ月が経った9月2日、63人の非転向長期囚が北に帰還した。

彼らには共和国英雄称号と祖国統一賞が授与され、最高の生活条件が保障された。

ある非転向長期囚が娘を授かった時、総書記はその子を「祝福（チュッポク）」と名づけた。

変わらぬ姿勢

金日成主席が他界してかなりの月日が経った時のことである。

党中央委員会政治局委員の一人が、もうそろそろ総書記を公式に党と国家の首位に推戴する行事を行うべきではないかと提言した。

総書記は即座に彼の提言を一蹴し、哀悼の声が歓呼の声に変わっては絶対にならないとしてこう言った。

「共産主義者は官職はどうあれ、革命を行えばそれまでです……

わたしはつねに自分を金日成同志の戦士と考えてきました。わたしは金日成同志が生きていた時も、亡くなった今も、変わることなく金日成同志の戦士としてその革命偉業を継承し達成していくつもりです」

そしてしばし間を置いた後、フルシチョフのような修正主義者たちが現れて革命家の道徳的信義を傷つけたとして、次のように

話した。

――スターリンが生きていた時、フルシチョフは彼を「不滅の英才」とたたえ、自分をスターリンの「忠実な教え子」と称し、誰よりも「スターリン万歳！」を声高く唱えた。なのに、スターリンが亡くなると、陰謀的方法で党と国家の最高の地位を奪い、スターリンを「横暴な独裁者」、「暴君」と中傷した。そして、「個人崇拝」に反対するという美名のもとに、ソ連の社会主義建設と祖国戦争の時期にスターリンが築いた業績を冒涜した。フルシチョフを頭目とする現代修正主義者たちは都市や工場、企業、コルホーズ、ソフホーズ、通りなどに冠していたスターリンの名をすべて消し、彼の記念碑を取り壊したあげく、赤の広場に安置されていたその遺骸を取り出して火葬に付するという妄動まで犯した。先代の領袖を人身攻撃し、その業績を抹殺するという点で現代社会民主主義者は現代修正主義者を上回った。現代修正主義者が主にレーニン的原則というベールをかぶってスターリンを攻撃したとすれば、現代社会民主主義者はそのベールさえ脱ぎ捨て、スターリンはもとよりマルクスやエンゲルス、レーニンまで悪意に満ちて誹謗中傷し冒涜した……

話を終えた総書記は語気を強めてこう言った。

―― われわれは推戴行事について神経を使うのではなく、どうすれば金日成同志が切り開いたチュチェの革命偉業を固守し、りっぱに継承して達成することができるかということについてのみ頭を使うべきだ。われわれはただ金日成同志が歩んできた革命の道を変わることなく歩むべきであり、その偉業を遂行する

ことに全力を集中すべきである……

永遠に高く仰ぐ

金日成主席が他界してひと月近く経ったある日、金正日総書記は再度錦繡山議事堂（当時）を訪ねた。

きょうは金日成同志を生前の姿のまま安置する部屋について君たちと話し合おうと思って来たとして、議事堂の内部を見て回っていた総書記はあるホールでふと立ち止った。

壮麗な滝が流れ落ち、奇岩怪石と色とりどりの花や紅葉が調和をなす金剛山（クムガン）を描いた壁画があることから、「金剛山ホール」と呼ばれているこのホールは、新聞やテレビを通じて人々によく知られていた。

主席はここで国内外の多くの人たちに会って記念写真を撮ったり、壁画を指差して外国の客人たちに朝鮮の美しさや悠久さについて話したりしたものだった。

壁画とその周囲を見やっていた総書記は、きょう錦繡山議事堂の内部を見て回ったが、金日成同志を生前の姿そのままに永久に安置する場所はここにすべきだと言った。

同行していた幹部たちは、主席が一番多く利用していた執務室であり、その面影がありありと感じられるここに主席を安置するのは至極当然なことであると考え、賛意を表した。

しかし、それが総書記が考えている理由のすべてではなく、よ

り重要な理由はほかにあることを彼らは知らなかった。

後日、総書記は幹部たちに次のように語った。

「わたしは錦繡山記念宮殿をチュチェの最高聖地として築くにあたって、金日成同志を生前の姿そのままに安置する部屋を高い所に設けました。レーニン廟は赤の広場のひな壇の下にあるので、閲兵式などの行事を行う際、ひな壇に並ぶ人たちが廟の上に立つことになりますが、それは道義にもとる行為です。わたしは金日成同志を生前の姿そのままに安置する部屋を高い所に設け、そこを訪ねる人たちが下から石段を登って金日成同志に黙礼するようにしました。われわれはみな金日成同志の戦士なのですから、当然そうすべきです」

最前線で表した敬意

1997年4月15日のことである。

金日成主席生誕85周年にあたる意義深いこの日も軍部隊への視察を続けていた金正日総書記は、最前線にある知恵（チヘ）山の平たい岩の前でふと立ち止った。

それは、祖国解放戦争（朝鮮戦争）中の1951年9月23日、知恵山に登った主席が作戦台として利用した岩であった。その日、主席はこの岩の上に作戦図を広げ、現地の指揮官から戦況について報告を受けた後、敵の「秋季攻勢」の主要攻略目標がどこであるかを最終的に判断したのであった。

それを伝える現地指導標識碑の前でしばし深い思いにふけっていた総書記は、指揮官たちの方を振り返って言った。

「われわれはきょう、4月15日を最前線で迎えたので、錦繡山記念宮殿を訪ねて金日成同志に敬意を表することができませんでした。知恵山に立てられたこの現地指導標識碑の前で金日成同志に敬意を表しましょう」

随員たちは熱いものを呑み込み、総書記にならって碑の前で襟を正した。

ついで、知恵山の頂に総書記の重々しい号令が響いた。

「気をつけ！　敬礼！」

活動家を泣かせる

某日、ある幹部は胸をふくらませて金正日総書記の執務室を訪ねた。

彼の手には国防力強化に関する文書が握られていた。それは、金日成主席が生前非常に重視し、その解決を願ってやまなかった問題だった。それが完全に成功したのである。

総書記の執務室の前に来た彼は、はやる心を抑えて静かにドアを開いた。

待っていたかのように、総書記は目を通していた文書を即座に横に押しやり、彼が持ってきた文書を受け取った。

静かな室内に書類をめくる音だけが規則的に響いた。

しばらくして、文書を最後まで読み通した総書記はそれを手にして立ち上がった。

そして、幹部のそばに寄ったかと思うと、その手をつかんで言った。

「さあ、早く金日成同志のところへ行きましょう」

（？！……）

瞬間われを忘れた彼は、足速に歩きはじめた総書記についていこうとした。

部屋を出ようとした瞬間、総書記はふと足を止めた。微笑を浮かべていた顔がくもっていた。

主席に喜んでもらえるといううれしさのあまり、現実を忘れてしまっていたのである。

彼をじっと見ていた総書記は、わたしには今も金日成同志が生きているように思われる、このように金日成同志が生前心を砕いていた問題が解決したという報告を受けると、われ知らず金日成同志の執務室に足が向いてしまう、と声をかすらせた。

とめどなく涙を流す彼の手を握って、総書記は言った。

「うれしい知らせをもってきた君を泣かせてしまったな」

ウラジーミル・Ｉ・レーニンに

2001年8月4日、モスクワの赤の広場で一つの衝撃的な出来事

が起こった。

金正日総書記がレーニン廟を訪ねたのである。

旧ソ連時代、レーニンの遺骸が安置されているモスクワの赤の広場はソ連の聖地であると同時に、世界革命の聖地と考えられていた。ソ連を訪問する社会主義諸国の党首脳や国家元首は決まってレーニン廟を訪ね、世界の労働者階級の偉大な領袖でありソ連共産党とソビエト国家の創建者であるレーニンに敬意を表することを一つの道徳的慣例と考えていた。

しかし、ソ連崩壊後、その慣例は抹殺された。おおっぴらにレーニンを中傷し冒涜することが許され、レーニン廟をなくそうという主張までまかり通っていた。

こうした厳しい情勢下にあって、総書記がレーニン廟を訪ねることについて随員たちは憂慮せざるを得なかった。

しかし総書記は、誰が何と言おうと今回の訪問期間に必ずレーニン廟を訪ねるつもりだ、わたしは領袖に対する真の革命家の道徳的信義をもってレーニン廟を訪ねるつもりだ、わたしがレーニン廟を訪ねることについてとやかく言う者があれば、それが誰であれ、道徳的信義に欠けた低劣な人間であることを自ら暴露することになるだろうと言って、次のように語った。

―― 珠は泥水の中でも光を放つものだ。世界の労働者階級の領袖の墓が革命の裏切り者たちによって見捨てられ冒涜されている時に、われわれが堂々とレーニン廟を訪ねたら、真の革命家の気高い道徳的信義がどのようなものであるかを思い知ることだろう……

総書記は、**「誰が何と言おうと、われわれは計画どおりレーニン廟を訪ねるべきです」**と断言した。

総書記を乗せた車がレーニン廟のある赤の広場に到着した時、随員たちは驚きを禁じ得なかった。ロシア側はその日の朝までレーニン廟訪問の形式について知らせてこなかったのに、いつの間にか迎接の準備を整え、儀仗隊まで整列させていたのである。

この十余年の間どの国の党首脳も国家元首も訪れたことのなかった赤の広場のレーニン廟、儀仗隊の「1号哨所」もなくなり、ひっそりかんとしていた広場が、この日は盛大な行事の雰囲気に包まれていた。

真夏の日差しが照りつける舗石を踏みながら、総書記は粛然とした面持ちでゆっくりとレーニン廟に向かった。

その前では、ロシアの若い軍人たちが総書記名義の花輪を携えて規律正しく歩を運んでいた。

それは短い距離ではあったが、ロシアと世界各地からやってきたジャーナリストたちが歴史的瞬間を逃すまいとせわしく動き回った。モスクワとロシア、いな全世界が息を殺して総書記の崇高な姿を注視していた。

軍人たちが花輪を下ろして一歩退くと、総書記は花輪に近寄ってリボンをまっすぐにした。

リボンには**「ウラジーミル・Ｉ・レーニンに　金正日」**と書かれていた。

総書記は黙礼して敬意を表した。

総書記がレーニン廟を訪ねたニュースは全世界を沸き立たせた。

世界のメディアは先を争って報じた。

「8月4日は、歴史のあらゆる反動勢力によって辱められていたレーニン廟が救世主に会った日である。

金正日総書記がレーニン廟を訪ねたことは、社会主義のためにたたかう全世界の革命家に無限の力と勇気を与えた大勇断であり、金正日総書記のような方に従えば社会主義運動は必ず勝利するということをさらに強く確信させた歴史的な出来事であった」

「20世紀の社会主義偉業の開拓者に対する21世紀の社会主義偉業の指導者の崇高な敬意は、世界の自主化偉業の領袖としての金正日総書記の特出した道徳的信義を示した感動的な出来事である」……

6　謙　虚

ワタの花

金正日総書記がある農場のワタ畑を訪ねた1969年9月のある日のことである。

ワタ畑を見渡して作柄がよいことに満足の意を表した総書記は、同行した幹部たちに一番好きな花は何か順に言ってみるようにと促した。

すると彼らは、美しくかぐわしい花が好きだと言い、ツツジやスズラン、バラなど、てんでに自分の好きな花の名をあげた。

それを聞いた総書記は、もちろん人々は美しくかぐわしい花を好むものだ、君たちが言ったようにバラは美しくかぐわしいので人々が好むのは確かだ、しかしバラより美しい花がある、それはほかならぬワタの花だ、わたしはワタの花が好きだ、と言った。

夕刻、宿所に帰った後も疑問が解けなかったある幹部が、本当にワタの花が好きなのかと総書記にたずねた。

総書記は口元に笑みを浮かべ、一言で答えると君が納得できないだろうから先に君に聞こうと言って、顔もきれいで香水の匂いを漂わせているが、誠実に働かず自分の利益だけを図ろうとする第1の部類の人と、顔はきれいでなく香水の匂いも漂わせていないが、かげひなたなく良心的に誠実に働く第2の部類の人のうち

で、どちらの人がより美しいかとたずねた。

「第2の部類の人の方が美しいです」と、彼は即座に答えた。

総書記は君の言うことは正しいとして、言葉を継いだ。

――「1人はみんなのために、みんなは1人のために！」というスローガンを掲げてたたかうわれわれの社会主義社会において、美しい人は祖国と人民のために誠実に働く人だ。この世に美しい容貌と香水の匂いを嫌う人はいない。しかし、その美しい容貌と香水の匂いが人民に愛されない時は憎むべきもの、嫌悪の情を起こさせるものとなる。それゆえ、ことわざにも人がかわいいにあらず仕事がかわいいというのがある……

その幹部はやっと理解したようだった。

総書記は話を続けた。

―― 先程話した二つの部類の人を花にたとえるなら、第1の部類の人はツルバラのようで、第2の部類の人はワタの花のようだ。ツルバラは観賞用として多く栽培されているが、花が咲いて散った後は何も残らない。しかし、ワタの花はバラのようにかぐわしく美しくはないが、その代わりすばらしい綿を与えてくれる……

「ワタの花はそれほど立派なことをしながらも、人前に出ようとしません。かえって恥ずかしそうに花をぱっと咲かせずに地面を見下ろして咲いています。

わたしは、ワタの花が大きなことをしながらも自分の姿を現そうとしない花なので、一層情が移って愛しているのです」

花模様の座布団と針のむしろ

1974年3月のある日、全国工業大会の参加者が金日成主席とともに記念写真を撮った時のことである。

金正日総書記は関係部門の幹部たちを呼び、この写真を見ると労働革新者は少なく党活動家と行政・経済幹部が多すぎる、幹部が前列に立って写真を撮ったのは間違っていると叱責した。

総書記は話を続けた。

――自分を特別な存在だと思う君たちのその考え方が間違っている。思いあがり礼儀もわきまえていない。もちろん金日成同志と記念写真を撮るのを光栄なことだと考えるのはいいことである。しかし君たちは労働革新者が前列に立って写真を撮るよう譲るべきである……

幹部たちは顔を上げることもできなかった。

しかし、その後も幹部たちのあいだには同じような欠点が現れた。

ある重要プロジェクトの建設工事が完工して主席と記念写真を撮る時、現地に派遣されていた幹部たちがまた前列で写真を撮ったのである。

総書記はまた幹部たちを呼んで、これは間違っている、きょうのような日には写真を撮るにしても、金日成同志の近くの前列には建設工事で誰よりも苦労した労働者や技術者、科学者を立たせ、幹部は後列に立つのが礼儀というものではないか、人の美徳

の一つは譲ることだというのに、どうして幹部がそんな道徳も守らないのかととがめた。

そしてこう言った。

「花模様の座布団は人に勧め、針のむしろには自分が座る人が真の人間です。

わたしはみながそのような幹部になることを願っています」

人民の息子

金正日総書記が学生時代の1961年、学友たちとともに平壌市の臥山洞(ワサン)――龍城(リョンソン)間の道路拡張工事に参加した時のことである。

ある日、作業現場の入り口にバケツと十能(じゅうのう)を持った老女が現れた。時折作業現場から石炭が出てきたのだが、それを持っていこうとしていた。

総書記は家の石炭が切れたのかと聞いた。

大切な石炭をそのまま地中に埋もれさせてしまうのが惜しいからだという老女の話を聞いた総書記は、土を押しのけて掘削機で石炭を掘り出し、安全な所に移して住民が持っていけるよう対策を講じた。そして、自ら十能で石炭をすくって老女のバケツに入れてあげた。

帰りがけにその人が誰であるかを知った老女はあたふたと駆けもどり、「このおいぼれのためにこんなことをしていただくとは……」と言っては言葉をとぎらせた。

総書記は老女の手をとってこう言った。

「……わたしも勤労する人民の息子です。人民のためならどんなことでもするつもりです。この世に人民のために働くことよりすばらしいことはありません」

一番つらい時

1969年8月のある日のことである。

ある幹部が現地指導をしている金正日総書記の宿所を訪ねた。

廊下でルームメイドが涙を拭っているのを見た彼は、その訳を聞いた。

彼女は、「部屋に入ると、何とあの方が洗濯をしているではありませんか。わたしが洗濯物を持って部屋を出ようとすると、やめなさい、そのまま置いていくようにと言われるのです。どうすればいいのでしょう」

その幹部が部屋に入ると、案の定総書記は今しがた洗濯をし終えたようで、シャツや靴下を掛けたハンガーを風通しのよいドアの近くの椅子に掛けていた。

幹部を笑顔で迎えた総書記は、コップに魔法瓶の水を注いで勧めた。それは氷の浮かんだスンニュン（御飯を炊いた後の釜に水を入れて沸かしたもの）だった。夏はこれが一番だとして総書記は日ごろから好んでスンニュンを飲んでいた。

幹部は、「洗濯までするのですか。洗濯なんかはルームメイド

に頼めばよいではありませんか」

すると総書記は、きょうはわたしの私生活に干渉する人が多いと言って笑った。

「干渉ではありません。洗濯なんかはしないようみなが願っているので申し上げたまでです」

総書記は声を立てて笑った。

「幼い時からの習慣を捨てる訳にはいきません」

幹部は引き下がらず、それでもどうか洗濯だけはやめてほしいと頼んだ。

すると総書記は、それならわたしが習慣を改めるべき理由は何なのか言ってみなさいと言った。

彼は、金正日同志は全人民が仰ぎ慕っている方なのに、そんなことまでする必要があるのか、と真情を吐露した。

総書記は、あなたはわたしを王子にするつもりなのかと言って、こう聞いた。

「あなたが一番つらいのはどんな時ですか」

彼が返答に詰まると、総書記はこう言った。

── わたしは今のような時が一番つらいのです。言いかえれば、人々がわたしを特別な存在と考え、特別扱いしようとする時が一番つらいのです。そのつらさは筆舌に尽くしがたいものです。強いてそのつらさを表現するなら、「針のむしろ」に座っているような気持ちです ──

総書記の話を聞いて、幹部は自分の言ったことが総書記の心を痛めたのだと悟り、恐縮した。

総書記は言葉を継いだ。

── 金日成同志は自分のうえに人民がおり、自分は人民の息子だと考えている。それゆえ、生涯人民と苦楽をともにしながら、限りなく謙虚に、質素な生活を営んでおられる。わたしの生活信条も金日成同志のそれと変わりない。われ金正日のうえに人民がおり、金正日は人民の息子だ、これがわたしの生活信条だ。わたしは人民の息子としての道義を果たすため、いかなる特典や特恵も願わなかったし、これからも願わない。人民のように質素な生活をするのがわたしの最高の楽しみだ。だから今後は絶対に、わたしに洗濯をほかの人にさせるようにといった特典や特恵を勧めるべきではない。わたしに特典や特恵にあずかるよう勧めるのは、わたしを「針のむしろ」に座らせるようなものだ……

順番を待つ

1972年10月某日の午後のことである。

平壌市のあるガソリンスタンドの前門から1台の乗用車が警笛を鳴らしながら入ってきた。

車を止めた警備員が運転手に怒鳴りつけた。

「なぜ後門から入らずに前門から入ってくるんだ？　後戻りして後門へ行け」

車から降りた運転手が頭を下げ、急用があるので事情を汲んでもらいたいと言ったが、警備員は聞き入れなかった。

その様子を見ていたガソリンスタンドの責任者は、運転手の礼儀正しい振る舞いに感動し、そこまで言わなくてもよさそうだがと思った。

この時だった。

車のドアが半開きになり、このガソリンスタンドの秩序が後門から入って給油し前門から出ることになっているのなら、早く車を後戻りさせるようにという、穏やかな声がした。

そして、後ろのドアが開いたかと思うと、満面に笑みをたたえた若い人が降りてきた。

責任者が挨拶すると、その人は何とも申し訳がない、ここは初めてなので秩序を知らずに前門から入ってしまった、急を要するあまり自分たちのことだけを考え、ここの秩序に考えが至らなかった、と言った。

そして運転手に、後戻りするように、秩序を守るべきだ、みなが秩序と法規を自発的に守るべきだ、と言い聞かせた。

車は後門へ向かった。

しばらく立ちつくしていた責任者は、いくら考えても普通の人ではないような気がして後門に駆けつけた。

その車は列をなした車の最後尾につけていた。

運転手からその人が誰であるかを聞いた責任者は、すぐに前の車の運転手たちに急用のある車があるので道を開けてほしいと言った。

運転手たちは警笛を鳴らして道を開けた。

責任者はその車の運転手に前に出るようにと言った。

運転手が警笛を鳴らして前に出ようとすると、総書記はたしなめた。

── 前に出てはいけません。われわれだからといって例外となってはなりません。ほかの人たちが待っていれば、われわれも順番を待つべきです。われわれも社会と人民の法秩序を守らなければなりません ──

こうして、総書記の車はほかの車と同じように順番を待った。

その車がガソリンスタンドの構内に入った時、責任者は改めて総書記に挨拶した。

総書記は笑って、二度も挨拶することはない、われわれが順番どおりに入ってくるべきなのにあなたに迷惑をかけてすまない、と言った。

そして運転手に、車がガソリンスタンドの構内に入る時は運転手しか入れないことになっているようだ、これもガソリンスタンドに設けられている一つの規則なのだからわれわれもそれを守るべきだ、さあ入ってガソリンを入れてきなさい、と言いつけた。

責任者がそのまま車の中にいても構わないと言ったが、総書記は固辞して道のそばに立っていた。

一般車の乗客

1975年6月のある日のことである。

外国訪問中の金日成主席が祖国の営農状況を心配していると

いう報告を受け、西海岸地方に出向いて夜遅くまで営農状況を確かめた金正日総書記は、これから東海岸の江原道へ行ってみようと言った。

随員たちは困惑した。彼らは当然平壌へ向かうものと思っていたのである。

それで、夜も更けたので行くにしても明朝にしてはどうかと言った。

しかし総書記は、金日成同志が遠い外国にいながらも祖国の営農状況を心配しているというのに、われわれがぐっすり眠りながら仕事をすることはできない、今晩中に江原道へ行って東海岸の営農状況も確かめなければならない、と言った。

彼らは、それなら直ちに車を手配すると告げた。

すると総書記は、列車で行くことにするから運転手たちは休ませるようにと言いつけた。

それで彼らが特別列車を手配しようとすると、総書記は、その必要はない、鉄道のダイヤは一旦組んだらそれを守るべきだ、夜更けに特別列車を手配すると鉄道の運行に支障をきたすことになる、とたしなめた。

そして、元山（ウォンサン）行きの列車は何時に出るのかと聞いた。

ある随員が発車時間を告げると、総書記はそれなら都合がよいと言って話を続けた。

「わたしも人民のために働く活動家ですから、人民が乗る一般の列車に乗っていくことにします」

そして、駅でその時間まで待って列車に乗り込んだ。

数日後、咸鏡南道のある責任幹部は、江原道を現地指導した総書記が咸鏡南道の某駅を通過するという連絡を受けた。

彼が車を飛ばして駅のホームに駆けつけると、列車が汽笛を鳴らしながらホームに入ってくるところだった。

（すんでのことに遅れるところだった）

急ぎ足で列車の方へ向かっていた彼はふと立ち止まった。

それは特別列車ではなく一般列車だった。

見間違えたのではないかと思ったが、確かに一般列車だった。

（特別列車はまだ着いていないのか？……）

その時であった。

聞き慣れた太い声が聞こえてきた。

「責任書記が来ていたのだね」

その一般列車の客車の中で総書記がにっこり笑っていた。

服装も身のこなしもほかの乗客と少しも違うところのない総書記、総書記の質素さと謙虚さについてはじかに目にし、話もたびたび聞いていたが、このように普通の乗客と同様に一般列車に乗って現地指導を続けているとは考えもしなかった彼は、胸がいっぱいで目頭が熱くなった。

総書記は、この数日、国の営農状況を確かめていると言って、咸鏡南道の田植えの状況を聞いた後、彼に草取りを推し進め、肥料の生産を一段と高める課題を与えた。

そして、再び一般列車の客車に乗り込んだ。

列車は出発した。

しかし、総書記の平民としての姿、総書記が普通の乗客として

その列車に乗っていることを知っている人はごくわずかにすぎなかった。

「特使」の失望

1987年2月9日のことである。

ある責任幹部が金正日総書記を訪ねた。

同志たちの真情、いな全人民の切なる願いをこめて、その年の2月の祝日（金正日同志の誕生日、2月16日）を盛大に記念することを承認してもらうためだった。

彼の話を聞いた総書記は笑ってこう言った。

―― 君はわたしを説得しに来た「特使」みたいです。無理押しをすれば成功すると考えている君の心の内が顔に表れています。もっとも、泣いて駄駄をこねる子どもに乳首を含ませるということわざもあるにはあります――

総書記は話を続けた。

―― 君たちの気持ちはよく分かる。それに、わたしを思い、愛してくれる人民の気持ちもよく分かる。わたしが人民の気持ちを知っていればそれでいいではないか。君たちが2月の祝日だと言って何かの行事を行うと提起するたびに、わたしは本当にどうしたらよいのか分からない。わたしはあくまでも金日成同志の戦士だ。戦士の誕生日は祝日ではない。われわれは金日成同志の誕生日である4月の祝日（4月15日）だけを民族の大慶事として盛

大に祝うべきだ。わたしは人民が4月の祝日を楽しく過ごすのを見る時が一番うれしい……

総書記の話は彼の胸を打った。

しかし、このまま引き下がる訳にはいかなかった。

彼が押し黙っていると、総書記は語気を強めた。

── ほかの人ならいざ知らず、君までそんなことを言うと本当に困ってしまう。君はわたしの気持ちをよく知っているではないか。早く帰って私の言葉を伝えてもらいたい。わたしを喜ばせようとする君たちの提案はありがたいが、わたしの誕生日を仰々しく記念することは絶対に認める訳にはいかない……

彼の顔をじっと見ていた総書記は、遠からず金日成同志の生誕75周年を迎えるが、その時に4月の祝日を盛大に祝うことにしよう、と言った。

彼には、総書記の言葉が自分の誕生日を祝日にすることは絶対に認めないという宣言のように思われた。

返答に窮したが、このまま帰るしかないのかと思うと涙がこみあげた。

意を決して彼が哀願するかのように再度人民の願いだと告げると、総書記は切々と語った。

── 朝鮮人民は本当にすばらしい人民です。それゆえ、わたしは朝鮮人民を崇拝しているのです。わたしは自分の誕生日を迎えるたびに、人民のためなら石の上にも花を咲かせねばならないという座右の銘をかみしめています。人民が望むなら、石の上にも美しい花を咲かせて人民に栄光をささげたいというのがわたし

の率直な気持ちです――

彼は、これ以上「無理押し」をすることはできないと考え、総書記の限りなく謙虚な人となりに頭が下がる思いで執務室を出た。

3年目に公布された政令

1995年2月、朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会政令「親愛なる指導者金正日同志の誕生日である2月16日を民族最大の祝日として制定することについて」が3年目にしてようやく公布された。

生前、金日成主席が1992年2月7日に裁可したこの文書がなぜ3年目にして公布されたかを知る人は多くないだろう。

金正日総書記は久しい前から金日成主席の意を体し、国と人民のために大きな貢献をなしたことによって、人民に絶対的に信頼され欽慕されていた。つとに総書記を主席の偉大な後継者として推戴した朝鮮人民は、もう一人の偉人を戴くことによって望外の領袖の福運に恵まれたと自負していた。

朝鮮人民は以前から、総書記の誕生日である2月16日を主席の誕生日である4月15日と同様に民族最大の祝日として制定し、意義深く記念することを願ってきた。

しかし、総書記はそれを辞したばかりか、自分の誕生日には国事

を見たり現地指導をするなど、ハードなスケジュールをこなした。

総書記の誕生日を意義深く記念したいという人民の願いは日ごとに高まった。それは特に1982年2月、総書記の生誕40周年を機に人民から多くの手紙や請願が寄せられ、押しとどめることのできない全人民の要求となった。

その時も総書記は、金日成同志の誕生日だけが民族最大の祝日だとして、自分の誕生日を公表することさえ差し止めた。

これを知った主席は、人民の切なる願いを押しはかり、総書記の誕生日を公表するよう措置を講じた。

こうして同年2月15日、朝鮮の各新聞、放送は40歳の誕生日を迎える総書記に共和国英雄称号を授与することに関する中央人民委員会政令をトップニュースとして一斉に報じた。また、翌16日には総書記のために主席が自ら祝宴を催した。

総書記の誕生日を初めて公に記念することができるようになったことを喜び、人々は今年こそは総書記が誕生日に休息を楽しんでくれるだろうと考えた。

しかし総書記は幹部たちに、わたしはきょう金日成同志により多くの仕事をすることを誓った、金日成同志が切り開いたチュチェの偉業を継承し達成するのはわたしの畢生の使命だと語り、この日もある建設現場を現地指導した。

1992年2月に主席の裁可まで得た政令が3年間も発表されなかったのも、このように限りなく謙虚な総書記が厳しく差し止めたからだった。

7　意　志

2本のチョウセンゴヨウ

厳しい祖国解放戦争で朝鮮人民軍が一時的な戦略的後退をしていた1950年10月10日午後のことである。

当時8歳の金正日総書記は、金日成主席が朝鮮労働党を創立した意義深い日を記念して、妹と一緒に家のそばの陽当たりのよい山の麓にチョウセンゴヨウを植えるのだとして、その若木を掘り出しはじめた。

副官たちは総書記を助けて、根が傷まないように、根についている土が落ちないように掘り出して、植える準備をした。

総書記は妹と一緒に木を植える穴を掘りはじめた。

副官たちが自分たちがやるからやめるようにと重ねて言ったが、総書記は木を植える穴は丹念に掘らなければならないといって、仕事の手を休めなかった。

そして、妹に1本ずつ植えようと言い、掘り出してきた若木を副官たちと一緒に移し植えた。

この時、チョウセンゴヨウはいい木なのかと妹が聞くと総書記はこう答えた。

―― チョウセンゴヨウは本当にいい木だ。いつも青さを保っている木なんだよ。どんなに寒い冬の日に吹雪が荒れ狂っても恐れ

ない木だ。秋になるとほかの木の葉は落ちてしまうが、この木はその青さを保つんだ。また、多くの実をつけるんだよ――

そして笑みを浮かべて妹を見やり、このチョウセンゴヨウは今は小さいけれど、ぼくたちが毎日水をやりよく育てれば大きくなって実をたくさんつけるだろう、そうしたらお父さんと一緒にここに来るんだ、お父さんがぼくたちの植えたチョウセンゴヨウを見たらとても喜ぶだろう、と話した。

翌日、総書記は最高司令部へと発つ副官に、ヤンキーどもはわが国を乗っ取ろうと襲いかかってきたが絶対にそうはいかない、ヤンキーどもが1本の木を焼き倒せばぼくたちは10本、100本の木を植え、祖国の山野をもっと青く茂らせなければならない、この木がすくすくと育った時わが国は世界で一番裕福な国になるだろう、と確信に満ちた口調で語った。

もっとも厳しい日々にも、勝利の日を固く信じて2本のチョウセンゴヨウを植えた時、総書記はわずか8歳であった。

愛するもの、憎悪するもの

1958年10月某日、ある活動家が高級中学校に通っていた金正日総書記に、一番愛するものと一番憎悪するものは何かと聞いた。

知りたいことがあれば我慢できない彼の性分をよく知っている総書記は豪快に笑って、**「わたしが一番愛するものは何かというんですか」**と言った。

その後、二人のあいだには次のような言葉のやりとりがあった。

「わたしは、わたしの心に柱として打ち立てた革命的信念をもっとも熱烈に愛します。わたしは、わたしの革命的信念に少しでもひびが入ってはならないと考え、毎日自らを鞭打って胸の熱い血を沸かせています」

「よく分かりました。では一番愛する人と一番軽蔑する人はどんな人でしょうか」

「わたしが一番愛する人間は信念が強くて、どんな逆境にあっても変わらない人間、意志を曲げず屈しない人間です。

わたしが一番軽蔑する人間は信念のない人間、意志が弱くてすぐ屈する人間です。

一言で言って、わたしは革命的信念が強い人間を熱烈に愛し、革命的信念を捨てる人間を身震いするほど憎悪します」

「もう一つお願いがあります。革命家の人生哲学に関して、わたしの人生において永遠の道づれとなる名言をお聞かせください」

「革命家は人生のはじめの門も正しく開くべきですが、人生の終わりの門もきちんと閉めなければなりません。一生革命的信念を命よりも愛せよ、世を去る時、革命的信念を枕にして目をつむる人生の最優等卒業生となれ！　これがわたしが君に頼みたいことです」

あの日の宣言

1959年1月のある日、金正日総書記がモスクワ総合大学を参観した時のことである。

この大学は1750年代に創立された伝統ある大学であり、当時は複数の大きな研究所と数百の講座、百数十の講義室と1700余の実験室、4000余の教室と6000余の個別教授室を擁するまでになっていたので、その国の人たちが自慢するのも無理はなかった。

そのうえ、数年前に建てられた新しい校舎と資金を投じて整えた教育設備は人々の羨望の的となっていた。

総書記は興味津々の表情で教室や研究室、実験室などを見て回った。

休憩室で、案内役を務めていた大学の関係者は大学の沿革について再度述べた後、世界各国の青年がこの大学で学んでおり、この大学が閣僚級の人物を輩出していることについて、実例を挙げて説明した。

そして総書記に、「高級中学校を卒業したらぜひ本校で学んでください。これはわたし個人の外交辞令ではありません。人類の進歩のために天才たちを大事にしてきた本校自身の願いです」と提言した。

真実みにあふれる言葉であったが、総書記はこう答えた。

「そう勧めてくれるのは非常にありがたいが、平壌にもりっぱな大学があります。わたしは学友たちと一緒に金日成総合大学

で学ぶつもりです」

世界5大陸の青年学生がそこで学ぶことを願ってやまない大学、にもかかわらず総書記はそれを辞して金日成総合大学で学ぶと宣言したのである。

後日、人々は、その日の宣言がいかに崇高な雄志と偉大な信念の返答であったかを思い知った。

朝鮮よ　その名を輝かさん

1960年9月1日、金日成総合大学に初登校をした金正日総書記は、学友たちを誘って龍南(リョンナム)山に登った。

大同(テドン)江の向こうから昇る朝日は、灌木のあいだに延々と広がる緑の芝生を照らしていた。

山頂に立った総書記は腰に手を当て、朝日を浴びながら本校舎の方を見渡した。

しばらく四方を眺めていた総書記は、熱っぽい口調でこう言った。

「朝鮮革命を担う主人になって金日成同志の偉業を代を継いで成し遂げていくことは、時代と革命、祖国と人民に対するわれわれの崇高な義務です。

偉大な太陽の国―― 朝鮮を万代に輝かせる、これがわたしのゆるぎない信念であり意志です」

そして、総書記が詩情がわいてくるようだと言うと、学友たちはぜひそれを詠じてほしいとせがんだ。

総書記は朗々と詠じはじめた。

朝陽のぼる　龍南山の頂に立てば
3千里祖国の山河　胸に迫る
ここで　領袖の思想を学び
朝鮮革命の　主人となろう
ああ　朝鮮よ　その名を輝かさん
……

文人か武人か

金正日総書記が学生時代、御恩（オウン）洞での軍事訓練に参加していた1962年9月のある朝のことである。

肌寒い日だったが、いつものように山あいの冷たい泉で冷水摩擦をして帰ってくる総書記に、学友が大学を卒業したら軍事に携わるつもりかと聞いた。

思いがけない質問を受けた総書記は豪快に笑い、将来わたしが文人になるつもりなのか武人になるつもりなのか知りたいというんだね、君たちの考えはどうなんだねと聞き返した。

学友たちはてんでに、政治経済学を専攻しているのだからその方面に進むのではないか、軍事に格別の関心を払っているので軍事を志しているのではないか、と言った。

しばし学友たちの顔を見ていた総書記は、おもむろに話し始めた。

―― わたしは文武ともに重視する。いずれもおろそかにしないで兼備するつもりだ。それもある程度ではなく、知るべきものをすべて知り、それをさらに掘り下げていくつもりだ……

このように自分の意志を表明した総書記は、今わが国において軍事より重要な事業はない、政治家は文武を兼備しなければならない、この言葉の真意は政治家は軍事を知らなければならないということである、帝国主義者が社会主義諸国を圧殺しようと絶えず軍備を増強するとともに、機会があれば戦争を起こそうと策動している現状に即して政治家は必ず文武を兼備しなければならない、そして軍事科学技術が高度に発展している今日にあっては、軍事を深く理解し、それに完全に精通しなければならない、と言い聞かせた。

総書記の話を聞いた学友たちは粛然として襟を正した。

総書記は、文人になるか武人になるかという問題を単に個人の運命の問題としてではなく、国と民族の明日の運命と結びつけて考えていたのである。

総書記は言葉を継いだ。

―― 軍事にうとい政治家は真の政治家ではない。現代の政治家の権威と役割、実力は非凡な軍事的知略と胆力、すぐれた用兵術にある。わたしは軍事第1主義を主張する。わたしは何よりも銃剣を重視し、つねに銃剣を第1とみなすことを隠そうとはしない――

高く掲げよう赤旗を

1964年6月20日は格別空が澄み渡ったすがすがしい日であった。

前日、党中央委員会での活動を開始し、事務室で夜を明かした金正日総書記は、早朝から幹部たちとともに庁舎の庭園を散策した。

そして、ふと歩みを止め、庁舎にひるがえる赤い党旗を見あげた。

風になびく旗をじっと見つめながら、総書記はこう言った。

「党中央委員会の庁舎に空高くひるがえる党旗は、火の海を突き抜け厳しい試練の峠を越えてきた勝利と栄光の旗であり、革命の旗です。わが党旗の歴史は、金日成同志が打倒帝国主義同盟を結成し革命の赤旗を掲げた時から始まりました。その時から、わが党の根元もしっかりと根を下ろすようになりました」

はためく赤い党旗を見すえたまま総書記は続けた。

「これからはわれわれがあの赤旗を高くひるがえしていかなければなりません。革命の前途にいかなる難関と試練が立ちはだかろうと、われわれは革命の赤旗を高く掲げ、金日成同志の偉業を達成するためいっそう強くたたかっていかなければなりません」

血の涙の年を送り

金日成主席の逝去による筆舌に尽くしがたい苦しみと涸れることのない血の涙のうちに、1994年も暮れようとしていた。

夜のしじまの中で、金正日総書記は亡き主席と、そして愛する人民と言葉を交わしていた。

しばらくして、総書記は党と国家の指導幹部たちにこう言った。

「われわれは金日成同志を失った悲しみを抱きながら、この年を送ろうとしています。

金日成同志は一生涯、人民の自由と幸福のために、祖国の繁栄と富強・発展のために、あらゆる労苦を尽くしてきました」

主席を失った哀惜と悲憤の念に駆られて絶句してしまった総書記を見て、幹部たちはうなだれた。あちこちですすり泣く声がした。

総書記は悲しみをこらえて語り続けた。

── わが国、わが祖国をさらに富強にすることが、金日成同志の志であり、偉業であった。われわれはその志と偉業に従って、わが国、わが祖国をさらに富強にしていかなければならない──

総書記の言葉は、主席の霊前にささげる誓いの言葉であり、揺るぎない信念と意志の宣言であった。

時間は刻一刻と流れた。

全国の人民が総書記の新年の辞を待っていた。また敵たちも、元日には総書記の新年の辞があるはずであり、それによって朝鮮

の意志、朝鮮の進軍路を知ることができるだろうと、さまざまに推理、推測していた。

総書記は執務室の机に向かった。

室内は静寂に包まれ、机の上には一枚の真っ白な紙が置かれていた。

しばし思案をめぐらせていた総書記はおもむろに筆をとり、全人民に送る書簡をしたためた。

「血の涙のうちに1994年を送り新年を迎えました。

金日成同志の戦士、金日成同志の教え子らしく、わが国、わが祖国をより富強にするため、われらすべてが一心同体となって奮闘しましょう。

1995・1・1

金 正 日」

この時、空にはまだ星がまたたいていた。

しかし、朝鮮では偉大な歴史の朝焼けが輝いていた。

永遠なる主席

1998年9月5日、世界各国の通信、放送は一斉に平壌放送に耳を傾けた。

数分後に朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第10期第1回会議が開かれる。会議では、全世界が大きな関心をもって待って

きた朝鮮の新しい国家指導機関の選挙、とりわけ共和国の新しい主席が選出されるはずだ。

金正日総書記が共和国の主席に選出されるであろうことは、誰も信じて疑わなかった。このことを既定の事実として、歓呼の声が沸きあがる朝鮮を想定した記事をあらかじめ準備している通信社もあった。

ところが、あらゆる予想を覆すニュースが伝わった。

―― 偉大な領袖金日成同志を共和国の永遠なる主席として仰ぐ！

このニュースに接した世界の多くの人々は自分の目と耳を疑った。

前の元首が死去したその日か、遅くともせいぜい数日内に新しい国家元首を選出するのが一般的な慣例である。にもかかわらず、朝鮮では国家元首の座が4年以上も空席のままであった。

延ばしに延ばしてきた推戴行事においてさえ総書記は金日成主席を永遠なる主席として高く仰ぐと宣したのである。その胸にははたしていかなる雄志が秘められていたのであろうか。

総書記は、主席の弔意行事が行われていた血の涙の1994年7月に次のように語った。

「金日成同志は他界したが、わが祖国と人民、世界と人類に特出した貢献をなし、最高の尊敬と欽慕を受けてきた金日成同志を、朝鮮の歴史にただ一人の主席、最初にして永遠なる主席として高く仰ごうというのがわたしの確固たる意志です」

そして、われわれは全人類の親しく尊い名となっている金日成

主席という尊称を祖国の歴史に永遠に記し、次代も主席といえばただ金日成主席一人のみを誇らかにたたえるようにしなければならないとして、わたしはこうした立場と姿勢で偉大な領袖金日成同志を生前と変わりなく永遠に高く仰ぎ、わが国で主席はただ金日成主席一人のみを歴史に永遠に輝かせるようにしようと決心したと語った。

その日、総書記は施政演説も、主席が生前、最高人民会議第9期第1回会議で行った施政演説の録音をもってかえた。

「戦争の神」

1990年代末葉のある日、金正日総書記が安辺（アンビョン）青年発電所を見て回った時のことである。

総書記が建設中の水路トンネルの中に入ろうとすると、関係部門の幹部たちが前をさえぎった。

「最高司令官同志！　トンネルの中は険しいです。それに水がたまっています」

しかし総書記は、トンネルの中に水がたまっているのなら車に乗ってでも必ず入ってみると言い、車に乗り込んだ。

ヘッドライトの明かりを頼りにトンネルの中を見る総書記の目はうるんでいるようだった。先ほど聞いた軍人建設者の偉勲談を思い返しているのかもしれない。

……腰まで水につかったまま一日中ハンマーを振るったりト

ロッコを押すと皮膚が膨れあがって下着や靴を脱ぐのも容易でなかったが、トンネルが貫通するまでは祖国の青空を見るまいと叫んだ兵士たち、落盤でトンネルに閉じ込められたが、配管を通して飯ではなく圧縮空気を送れと言った27人の軍人たち、作業中に不慮の事故に遭い瀕死の重傷を負ったが、仕事はできないが代わりに歌をうたうといって『赤旗の歌』をうたって軍人たちを励まし、息を引き取る瞬間には一日も早く発電所を建設して必ず敬愛する　最高司令官同志を迎えてくれと頼んだ年少の兵士……

総書記はトンネルの奥まで乗り入れ、軍人たちの苦労は大変なものだったろうと、重ねてその労をねぎらった。

そして声を励まして、軍人たちは偉大な奇跡を生み出しました、万難を排してわたしの命令を貫徹しました、まさにこれがわが軍隊の革命的軍人精神ですと言い、次のように続けた。

「スターリンは大砲を『戦争の神』だと言いましたが、わたしは軍人精神を『戦争の神』だと主張します。

精神的強者こそが何をもってしても計算しえない宇宙の最高強者だと言えます……」

巨木と根

朝鮮人民軍砲兵の一斉射撃の砲声が天地を揺るがした2009年2月のある日のことである。

強盛国家建設大戦の勝利を確信させるその砲声を聞いて、興奮さめやらぬ幹部たちは金正日総書記に、今日の歴史的なたたかいにおいて総書記に従い、巨木の青葉になるという決意を述べた。

総書記は微笑を浮かべて、葉の意味よりも根の意味の方が大きいとして、幹部は木の根のように祖国と革命を支える根とならなければならないと言った。

総書記はゆっくりと歩きながら話し続けた。

── 木がすくすくと育つためには根が丈夫でなければならない。木は根が丈夫であってこそたくましい巨木に育つのである。根が腐ると、いくら大きな木でも枯れはててしまう。巨木が無数の枝と葉を支えて立っているのは、根が丈夫で栄養素を絶えず送ってくれるからだ。巨木は目に見えるが、その根は見えない。巨木を見て感嘆する人はいても、その巨木を支えている根のことを考える人はあまりいないだろう。根は人知れず地中で巨木のために休みなく働いているのだ。革命と革命家との関係は巨木と根との関係と同じだと言える……

総書記の言葉は彼らの胸を打った。

「革命という巨木がいかなる狂風にも揺るがずすくすくと育つためには、根である革命家が健全で忠実でなければなりません。革命の根となろう、これが今日革命家がもつべき人生観です」

総書記は話し続けた。

── 革命家は根となろうと考えるべきである。葉は雨や冷たい風に打たれると落ちてしまうが、根は凍った土の中でもびくともしない。地中に深く伸び広がった根が栄養素を十分吸収すれば木

がすくすくと育つように、革命家がしっかり鍛えられて一心団結すれば革命は必勝不敗であり、祖国は無窮に繁栄するであろう。君たちは葉ではなく根となろうと考えるべきである……

彼らは口をそろえて、「われらはみな巨木の葉ではなく、巨木を支える根となります」と言った。

総書記は莞爾(かんじ)とほほえんでこう言った。

「わたしも君たちとともに、朝鮮革命の力強い根となるつもりです」

8　胆　力

力強い拳

1954年10月のある日、図画の時間のことである。

教員は、きょうの図画の時間には拳を描くことにすると言って、自分が描いた絵を黒板に掲げ、これを参考にしてそれぞれ拳を描くようにと言った。

生徒たちはそれぞれ絵を描きはじめた。

ひっきりなしに教員の絵を見ながら描く生徒もいれば、自分の左の拳を机の上にのせて描く生徒もいた。

方法や手法はまちまちだったが、みんな左の拳を描いていた。

ところが幼い金正日総書記は右の拳を、それも親指で二番目、三番目の指をぐっと握った力のこもった拳を描いていた。

他の生徒はまだ輪郭も描きおえていないうちに、総書記はもう明暗の処理をしていた。

教員が掲げた絵をくわしく見ようと黒板の前に行って戻ってきた生徒は、総書記が描いた絵を見て驚いた。後ろに座っていた生徒も肩越しにそれを見てびっくりした。

総書記はこう言った。

―― 先生は自分の拳を描きなさいと言った。自分の拳には右の拳もあり左の拳もある。だが右の拳は左の拳より力が強い……

授業時間が終わるころ、他の生徒の絵と一緒に総書記の描いた絵を受け取った教員は生徒たちを席につかせて、上手に描けた絵を一枚紹介すると言った。

総書記が描いた絵であった。闊達な筆致で『力強い拳』という題名まで書かれていた。

題目のように絵の中の強く握りしめた拳は、一度振り下ろせば岩も砕けそうだった。

生徒の中から「やあー」という感嘆の声があがった。

総書記はすでに幼いころから、帝国主義侵略者を一撃のもとに打ちのめす非凡な気性と無比の胆力を備えていたのである。

プエブロ号は返さない

1968年1月23日、朝鮮の領海を侵犯したアメリカの武装情報収集船プエブロ号を朝鮮人民軍海軍が拿捕した。

アメリカの艦船を拿捕したことは歴史上いまだかつてなかったことである。

アメリカは核空母をはじめ膨大な軍事力を出動し、プエブロ号を返還しなければ戦争も辞さないと威嚇した。

その時、金日成主席は金正日総書記に、最高司令官という立場でプエブロ号をどう処理すればよいか判断し決心してみるようにと言った。

総書記は、アメリカが降伏書を出す前には絶対にプエブロ号の

船員を釈放しないし、たとえ降伏書を出すとしてもプエブロ号はわれわれの戦利品として返さない、と断言した。

事態は総書記が言明したとおりになった。

アメリカは「『報復』には報復で、『全面戦争』には全面戦争で！」という朝鮮の断固たる意志と強力な軍事的対応措置に気がそがれ、彼らの罪業を認めて謝罪し、再発防止を保証する文書に署名せざるを得なかった。

こうしてプエブロ号の船員は朝鮮民主主義人民共和国領内からの追放という形式で釈放された。

しかし、プエブロ号は朝鮮人民軍の戦利品としてそのまま残された。

勇士たちを表彰しよう

1976年8月18日午前、板門店共同警備区域内に米軍警備将校をはじめ10余名の人員が大型トラックとジープで急に乗りつけ、北側地域のポプラの木を伐りはじめた。

巡察勤務中だった朝鮮人民軍警務員は、そのポプラはこちらが管理している木だから事前協議もなしに伐ってはならないと警告した。

しかし彼らは盗人猛々しく斧をふりかざして集団暴行を加えてきた。そして人員も数倍に増強した。

憤激した4名の朝鮮人民軍の軍人は敵がふりかざす斧を奪って

投げつけ、40名を上回る敵と激闘を繰り広げた。この過程で敵側は将校2名が即死し、数名の負傷者を出した。そしてあたふたと逃走してしまった。

こうして当時、世界を騒然とさせた板門店事件が起こったのである。

事件が起こるや待ちかまえていた米軍は即刻、待機させておいた数百名の兵力と数々の重機を共同警備区域内に持ち込む一方、米本土と沖縄から南朝鮮に兵力を増派し、空母ミッドウェイ号をはじめ「機動打撃艦隊」を朝鮮海域に機動展開した。

この日、人民軍の責任幹部から板門店警務員たちの闘争状況を聴取した金正日総書記は、戦士たちがよく戦ったと称賛し、彼らにどんな表彰をするのかと聞いた。

「情勢が緊張していて表彰については考えることができませんでした。……この事件のため直ちに戦争が起こりかねない危急な状況です」

幹部は不安をかくしきれなかった。

しかし総書記は、不意討ちをかけて危害を加えようとする者を野放しにしておこうというのか、当然の自衛的行動だ、誇るべき勇敢な行動だ、軍人にそういう気質がなければ敵を打ち破ることはできない、兵士たちがくるならこい、一発で打ちのめしてやるぞという自信満々な闘志と度胸をもって、いかなる状況にあっても恐れることなく戦うのはよいことだ、勇敢に戦った兵士たちに何を惜しもう、表彰をするからには大きくしよう、といって豪放に笑った。

こうして軍事境界線上の南側では鉄カブトをかぶり完全戦闘態勢を整えた敵が陣地に集結していた時、平壌では礼装した軍人たちが満場の拍手を浴び、栄誉の国家表彰を受けて幹部壇を下りる光景が見られた。

戦争と音楽

1976年8月、米軍が引き起こした板門店事件によって朝鮮半島に生じた危急な情勢は、スリランカの首都コロンボで開催された第5回非同盟諸国首脳会議に参加していた一外交官の心を緊張させた。

事件が発生して数日後に急遽帰国した彼は、旅装を解くやいなや金正日総書記の執務室に駆けつけた。

瞬間、彼は自分の目を疑った。

総書記が音楽を鑑賞しているではないか！

戦争と音楽、これは何と対照的ではないか……

総書記は音楽の音を低めて、遠路ご苦労だった、立っておらず近くに来て音楽を鑑賞するようにと言った。

彼は音楽が終わるのを待ってから言った。

「親愛なる指導者同志、コロンボで板門店事件の詳報を聞きました。正直な話、わたしは帰国しながらずっと戦争前夜の緊迫した情勢のため、気持ちが落ち着きませんでした」

彼の率直な気持ちを知った総書記はこう話し始めた。

「今敵が起こした板門店事件のため、わが国にはいつ戦争が起こるか分からない緊張した情勢が生じています。アメリカ人は板門店事件を起こし、それを口実に朝鮮で侵略戦争を起こそうと狂奔しています」

（だというのに音楽を鑑賞しているとは？！）

彼のこのような疑念を解くように、総書記はゆっくりと語った。

―― アメリカ人は大きな口をたたいているが、われわれと戦うことを避けようとしている。板門店事件でふるえているのは朝鮮人民ではなくアメリカ人だ。わたしは彼らの狂態を一種のアナクロ的な精神錯乱としか思わない。彼らの狂態はあくまでも三文芝居だ。アメリカ人は朝鮮人民の髪一本も侵せない……

将帥の気概と威厳に満ちた言葉を聴き、幹部は胸熱く胆力が沸きあがるのを感じた。

（ああ、アメリカ人の戦争騒ぎを3文芝居とみなすあの巨人のような胆力が室内を楽天的な歌、勝利の歌で満たしたのだ！……）

海に伸びたベルトコンベヤー

朝鮮の西部海岸に位置する殷栗（ウンリュル）鉱山は廃石処理の問題で頭を悩ましていた。ひきもきらず山のように堆積する剥土を処理することができず、そのために多くの労力と時間をかける必要があり、鉱石の採掘に支障をきたしていたのである。

殷栗鉱山は廃石のために廃鉱寸前の岐路に立たされていた。

こうした時の1974年1月初、金正日総書記は鉱山の実態を調べ、剥土を処理するための大型長距離ベルトコンベヤーを導入することを発案した。そして幹部を派遣してコンベヤー設置に関する具体的な現地調査を行わせた。

現地に派遣された幹部は、一鉱区から海岸までコンベヤーを設置するということで現地の幹部と合意をみた。それが成功すれば廃石は海に運び出されることになるのである。

幹部は鉱山の技術者たちと一緒に得意になって具体的な案を練りあげていった。

しかし事はたやすく進捗しなかった。研究を深め、工事の条件を一つひとつ検討してみると、工事の規模があまりにも膨大で力に余るものであることが分かった。

コンベヤーを海岸まで伸ばさず、途中で切ろうとしても適当な場所がなかった。

どうしたらよいのか。

幹部は思いあまって総書記を訪ねることにした。

「親愛なる指導者同志、……工事がとても難しそうです」

実態をありのままに報告した幹部は自分の考えを率直に述べた。

彼が自信をもてずにいるのを見た総書記は室内が響くほど大きく笑った。そして、まだ誰も試してみたことのない工事なのにそう簡単にできるはずはない、と述べた。そして自信に満ちた声で言った。

「われわれがこれまでやろうと決心してできなかったことが

ありますか。われわれには英雄的労働者階級の限りない創造的知恵と力があるではありませんか。自信をもっていっぺんやってみましょう。そして殷栗鉱山のベルトコンベヤーをわれわれの時代の大記念碑的建造物にしましょう」

総書記は席から立って壁に掛けられた大きな朝鮮地図の前に近づいた。

そしてしばらく西海岸のある一点に目を止めて思索にふけっていたが、やがて静かにこう聞いた。

「ベルトコンベヤーを青年鉱区から海岸まで設置すると言いましたね」

「……ええ、そうです」

「海岸までという訳だね……」

総書記はどことなく惜しむようにつぶやいた。そしてまた視線を地図に戻し、金山浦（クムサンポ）沖の大小の島に目を止めた。

幹部は地図を眺める総書記の目に明るい光彩が差すのを感じた。

やがて地図から目を離した総書記は決然とした語調で言った。

「わたしの考えでは、ベルトコンベヤーを海岸まででではなく海上にずっと伸ばすようにしようというのです。さあ、ここへ来なさい」

総書記は赤鉛筆で地図を指した。

「このヌングム島までベルトコンベヤーを伸ばそうというのです。そして、次にはこれらの島をみんな一つにつなぐのです」

5100ヘクタールの新しい土地！……

幹部の頭には稲妻のようにひらめくものがあった。

総書記は片手を腰に当て、微笑をたたえて言った。

「どうですか。自信が沸きませんか。こうすれば海をせき止めて多くの土地も得られるでしょう。……そうなれば祖国の面容は大きく変わるでしょう」

空前絶後のサッカー競技

世界屈指の西海（ソヘ）閘門を建設する時のことである。

1983年4月のある日、金正日総書記は現地に赴いて、仮締切り工事で提起されていた工法について報告を受けた。

第1の工法は既存の方法を適用するもので、それによれば堰堤を築くだけでも7年も要する。第2の工法は新しく開発した工法で、その工法を取れば工事の期日をはるかに短縮することができる。

しかし一部の人は、新しい工法どおりにすると外海の巨大な圧力で堰堤が崩れる恐れがあると憂慮した。

幹部の報告を受けた総書記は、新しい工法を主張する人たちの根拠は何かとたずねた。

「これまで人民軍で、小規模ではあってもそういう方法で工事を行ったことがあるというのです」

「それなら根拠は十分あるではありませんか」

総書記は断固として言明した。

―― われわれはあくまでも科学を信じるべきだ。水利工学試験を行い、小規模であってもそういう方法で仮締切り工事をやってみた経験があるならなぜちゅうちょするのか。経験と水利工学試験が証明したように、仮締切り堰堤は崩れない。わたしは新しい工法を支持する……

科学的には証明されているが、もしやと思って勇断を下せなかった幹部たちの杞憂は一瞬にして消え去った。

総書記の声が建設現場にこだました。

―― いま臆病な人たちは仮締切り堰堤が崩れはしないかと恐れているが、仮締切りが終わればわれわれはその底でいっぺんサッカー競技をやってみよう……

それから1年足らずの間に、軍人建設者たちは新しい工法で仮締切り堰堤を築き上げ、1000万立方メートルの海水まですっかり汲み出した昨日の海底で、頭上にざわめく波の音を聞きながらサッカー競技を繰り広げた。

ついに5年という短い期間に8キロに及ぶ外海をせき止めた巨大な西海閘門が完成した。

収録できなかった航路

1996年11月某日、金正日総書記は椒(チョ)島の防御隊に対する現地視察に向かった。

総書記の乗り込んだ快速艇に従って随員たちも続いた。

もともと波が荒く危険な航路だが、その日は大波まで立って人々の不安をいっそうかき立てた。
そのため、軍港で幹部たちは総書記を頑強に引き止めた。
「こんな日には大きな船でも安全は保証できません。将軍、どうか断念してください」
しかし総書記は、島ではわれわれを待っている、われわれがいつ順風に帆を上げて航海したことがあるかと言って船に乗った。
随行記者たちはこの険しい航行を歴史に残すためカメラとムービーカメラを手にした。総書記がどんな航路を分けて行ったのかを人民と世界に見せなければならない責任重大な瞬間であった。
ところが荒波はその威力を誇示するかのように、快速艇の船首を力いっぱい押し上げてはまた容赦なくたたきつけた。急角度にせり上げたり急降下する船上で、随行記者たちは自分の体も支えることができず、転んだりぶつかったりして傷ついた。カメラやムービーカメラはみなこわれてしまった。
記者たちは泣くに泣かれぬ心境だった。この苦難の航路を世に伝えることができなくなったことが怨めしかった。
だがカメラに収められなかったといって、その日の情景が消されたのではなかった。
その日の情景は島の岬に集まって、荒波にもまれながら近づいてくる快速艇を見ながら「最高司令官　同志！　戻ってください」と叫んだ椒島の兵士たちの網膜の中に、彼らの胸の中に収め

られたのである。

兵士たちはやがて総書記が島に無事到着するや、涙ながらに「万歳！」「万歳！」と叫んだ。

総書記は船から降りながらほがらかに言った。

「人が言っているより西海の印象はよい」

最高司令官命令

1993年初、アメリカは国際原子力機関を前面に立てて、朝鮮の核開発に対する「特別査察」、すなわち朝鮮の任意の軍事施設に対する強制査察を強要した。これと同時にアメリカは南朝鮮での「チーム・スピリット」合同軍事演習の再開を宣言し、情勢を再び戦争瀬戸際に追い込んだ。

世界はこの険しい情勢に朝鮮がどのように対応するかを深く憂慮して注視した。

そのころ朝鮮人民軍総参謀部の作戦室は高度の緊張感につつまれていた。

そうしたある夜半、作戦室の電話が鳴った。

総参謀長が受話器をとると、それは金正日総書記であった。総書記は人民軍各部隊の戦闘準備状態を確かめた後、豪放に笑いながら言った。

「一度アメリカ人ののどくびを押さえてこらしめてやりましょう」

作戦室の雰囲気はがらっと変わった。

（最高司令官同志はもう世界を驚かす大勇断を下したのだ）

敵が「チーム・スピリット93」合同軍事演習の実働段階に入る1日前の3月8日17時、朝鮮人民軍最高司令官の命令が国際社会を震撼させて響き渡った。

「……敵が数十万の大兵力と大量殺人兵器を投入して『チーム・スピリット』合同軍事演習を繰り広げるからといって驚く朝鮮人民ではなく、戦争を恐れて退く朝鮮の軍隊でもない。

……敵はわが共和国の寸土、一本の草もあえて侵すことができないということを知るべきである。

わたしはアメリカ帝国主義者と南朝鮮かいらい一味の新たな戦争挑発策動によってわが国に生じた重大な情勢に対処して、わが共和国と人民の安全を守る自衛的措置として次のように命令する。

1．全国、全人民、全軍は1993年3月9日から準戦時状態に移ること。

2．朝鮮人民軍陸・海・空軍部隊と朝鮮人民警備隊、労農赤衛隊、赤の青年近衛隊の全隊員は高度の革命的警戒心をもって敵の一挙一動を鋭く注視し、敵がいつ何どき襲撃してきても一撃のもとに掃滅できるように万全の戦闘動員態勢を整えること。

3．全人民はわが党の主体的な戦争観点で強く武装し、片手にはハンマーと鎌を、片手には銃をもって社会主義経済建設で一大高揚を起こすこと」

いかなる大敵を前にしても微動だにせず、超強硬の姿勢で立ち

向かう総書記の胆力に、敵は気勢がそがれてしまった。彼らは「チーム・スピリット93」合同軍事演習の計画を期日よりはるかに繰り上げて終え、早々と引き下がってしまった。

空言は吐かない

2003年1月初、アメリカの差し金のもとに国際原子力機関は再び特別管理理事会を開き、朝鮮が核拡散防止条約と核保障措置協定に違反したと言いがかりをつけ、保障措置協定を履行し、「核計画」を検証可能な方法で即時放棄し、凍結を解除した核施設を再凍結し、査察員の常駐も許容せよという「決議」を採択した。国際原子力機関の総局長は、朝鮮が数週以内に「決議」を履行しなければ国連安保理事会に回付して制裁を加えるという「最後通牒」まで発した。これは朝鮮の「核問題」を国際化して朝鮮を孤立させ圧殺しようとするアメリカの戦略に従ったものであった。

この「国際的圧力」に朝鮮はどう答えるであろうか。

ついに朝鮮民主主義人民共和国政府声明が発表された。

「……第1、アメリカが1993年6月11日付朝米共同声明により核威嚇の中止と敵対意思放棄を公約した義務を一方的に放棄した状況にあって、共和国政府は同声明により『必要であると認められる期間だけ一方的に臨時停止』しておいた核拡散防止条約からの脱退効力が自動的に即時発効することを宣言する。

第2、朝鮮民主主義人民共和国は核拡散防止条約からの脱退に

伴い、条約3条による国際原子力機関との保障措置協定の拘束からも完全に脱することを宣言する……」

強硬には超強硬をもって堂々と対抗する朝鮮の胆力に対する悲鳴とわめき、賛嘆と連帯の声が世界をどよめかせた。

翌日1月11日、金正日総書記は、共和国政府声明に関する世界各国の反響を収載した通信資料を手にして幹部たちにこう言った。

「われわれは核拡散防止条約からの脱退を宣言することによってアメリカとその追随勢力に、共和国の自主権と尊厳を侵すことに対してはいささかも容認しないと言明したわれわれの警告が決して空言でなかったことをはっきりと示しました」

総書記は敵にいま一度強打を浴びせるよう指示した。

今度は共和国外務省スポークスマンの声明が国連安保理事会招集直前に発表された。

「……国連安保理事会が結局アメリカの対朝鮮敵視圧殺政策に盗用されるなら、われわれは国の潜在力を総動員して戦争抑止力を備えざるを得ないということを公然とせん明する……」

「戦争抑止力」という言葉にどういう深刻な意味が盛られているかということは誰にも明らかなことだった。

国連安保理事会は、朝鮮に対する制裁決議案や議長声明が発表されれば朝鮮の「核問題」は永遠に解決されなくなる、したがって最良の方法は朝米直接対話であるという構成諸国の主張が通って幕を下ろした。

「光明星2」号の打ち上げ

すでに1998年8月に人工衛星「光明星1」号を一度で正確に軌道に乗せ、一躍宇宙強国の隊列に加わった朝鮮が、2009年4月に「光明星2」号を打ち上げようとすると、日本は朝鮮が衛星を打ち上げれば迎撃することを国策としてまで宣言した。

これに対し平壌は厳粛な宣言を発した。

1．日本が無分別にわれわれの平和的衛星に対する「迎撃」行為を強行するなら、朝鮮人民軍は容赦なくすでに展開された迎撃手段だけでなく、重要対象にも断固たる報復の砲火を浴びせるであろう。

2．アメリカはわれわれの平和的衛星打ち上げに関する自己の立場を明確に示したのであるから、被害をこうむらないようにするためには展開した武力を直ちに撤収すべきである。

3．南朝鮮のかいらい好戦分子は、米日の上司にへつらって民族の誇りであるわれわれの衛星打ち上げを妨害する行為をすべきではない。

われわれの革命武力は新たな重大な事態に対処して高度の戦闘準備態勢を整えており、敵対勢力がわれわれの平和的衛星に対する些細な「迎撃」の動きでも見せるなら直ちに正義の報復打撃を加えるであろう……

ついに地球を蹴って巨大な火炎を吐きながら朝鮮の「光明星2」号を搭載した運搬ロケット「銀河2」が打ち上げられた。運搬ロ

ケットの胴体には朝鮮の国旗が鮮やかに記されていた。

「迎撃」すると言っていた日本は鳴りをひそめた。

その日は4月5日、時間は11時20分、打ち上げ地点は朝鮮の北東部にある東海衛星発射場、衛星が軌道に乗った時間は9分2秒……

金正日総書記は衛星管制総合センターで打ち上げの全過程を観察した。

総書記は大いに満足し、こう述べた。

── きょうわれわれは人工衛星「光明星2」号を見事に打ち上げた。アメリカ帝国主義者とその追随勢力は、われわれが平和的試験通信衛星「光明星2」号を打ち上げると言うと大事変でも起きたかのように、打ち上げれば「迎撃」するの「制裁」を加えるのと騒ぎ立てた。特に日本の反動勢力はわれわれが衛星を打ち上げれば「迎撃」を国策にするとまで宣言した。もしも敵が「迎撃」を企図したならば、われわれはその迎撃基地は言うまでもなく、重要対象も放置しはしなかったであろう……

9　魅　惑

金正日花

この世には美しさと香りによって人目を引く花が多い。

それら数多い花の中でもひときわ人々の注目を引く花がある。金正日花である。

とりわけ大きく咲く花房、燃えるような真紅の魅惑的な花びら、清新で力強い感じを与えるハート型の青い葉……

赤色系のベゴニアで、ベゴニア科の花卉の中でももっとも美しく珍しく、120余日間も次々と咲くこの花は、日本の園芸家、加茂元照が育種したものである。

彼はその花に、平和と正義の守り手、美しい未来の設計者、万民の敬慕する救世主の尊名を冠したかった。こうして世界を見渡し、偉人伝も耽読した末に、金正日花と命名することにした。

彼は金正日総書記に手紙をしたためた。

「……私が真心をこめて育種致しました球根ベゴニアをお送り申し上げます。

私の未熟な植物に、偉大であらせられる閣下のお名前を冠することは、まことに恐縮と存じましたが、閣下の万年長寿をお祝い申し上げ、輝かしい未来の隆盛発展を念頭致す心情を止めかねて、敢えて『金正日花』と命名致しました。

この植物を閣下に贈呈致すことをお許し頂ければ身にあまる光栄でございます。

金正日閣下の万年長寿を心からお祈り申し上げます。

1988年2月13日

加茂元照」

こうして生まれた金正日花は世に知られるやいなや人々の驚嘆と絶賛の対象となった。

金正日花は1991年5月、チェコスロバキアのブラチスラバで開催された第12回国際花卉展示会で最高賞の特別賞と金メダルを受けた。1997年8月、中国吉林で催された花卉博覧会でも最優秀賞を受けた。99昆明世界園芸博覧会でも最高賞のグレンド賞を受けた。2011年、西安世界園芸博覧会では特別に制定された展示金賞を受けた。

金正日花は世界の多くの国と地域に普及された。多くの国と地域に金正日花協会や愛好会などが組織され、多くの都市で金正日花展示会が盛況を呈している。

金正日花を見る人々は、あたかも差し昇る太陽を見る思いだ、さすがに偉人の名で命名された花は違うと賛辞を惜しんでいない。

スカルノの感服

1965年4月、インドネシアのバンドンで第1回アジア・アフリカ首脳会議10周年記念行事に参加した金日成主席はボゴール植

物園を参観することになっていた。
　植物園はバンドンから遠く離れたところにあった。
　ところが突然、出発時間が変わる状況が生じた。
　随員たちは驚かざるを得なかった。しかし、スカルノ大統領が主席の身辺護衛のために直接講じた措置であることを知って安堵の胸をなでおろした。
　理由はこういうことであった。
　この日の朝、スカルノは自分の護衛部長から朝鮮の「若い司令官」が先兵となって先発車で出発しようとしているという報告を受けた。
　前日のバンドン行事の際、「若い司令官」は夜が明けると先発して道路の状態や道路周辺の地形地物を詳しく調べ、ぬかりなく護衛安全対策を立てた。そしてきょうはまたボゴールへの遠路に向かおうとしているのであった。
　これに深く感動したスカルノは、自分がじかに主席の身辺護衛を指揮することを決心した。そして講じた措置であった。
　スカルノの補佐官の話によれば、彼がこのように直直に行事を指揮するのは初めてだとのことだった。
　金日成主席はインドネシア訪問を終えて催した宴会の席で、スカルノ大統領がじかに無線マイクを手にして護衛を指揮してくれた誠意に謝意を表した。
　するとスカルノは手を振ってこう述べた。
　「その謝意は貴国の『若い司令官』が受けるべきでしょう。『若い司令官』の正式の官職は何でしょうか」

その質問に主席は、わたしの身辺を受け持った責任副官です、責任副官にはわたしもかないません、と言って豪放に笑った。

スカルノは大いに感服し、親指を立てて見せながら羨んだ。

世界的にプライドが高いことで知られた大統領であり、年も60を越した名望家の国家元首であったスカルノが感服してやまなかった「若い司令官」は、ほかならぬ当時20代の金正日総書記であった。

鄧穎超の涙

1983年6月、中国を訪問中だった金正日総書記が周恩来の夫人であり、中国人民政治協商会議全国委員会主席の鄧穎超の私邸を訪ねた時のことである。

総書記が挨拶を述べようと、老革命家を尊敬して席から立ち上がると、鄧穎超は急いで立ち上がり、総書記の手をとって座って話すよう促した。

それでも総書記が座ろうとしないと、鄧穎超はそれでは自分も立っていると言って立ち上がった。

今度は総書記が立ち上がった鄧穎超に座るよう勧めた。

総書記は鄧穎超に引き止められて仕方なく座ってこう言った。

「わたしが中国に来る時、金日成主席は鄧穎超同志に自分の心からの挨拶とお見舞いを伝えるようにと言われました。金日成主席は鄧穎超同志がもうお年を召しておられるのでお体の具合

はどうなのかとても心配しております」

鄧穎超の目からは熱い涙がこぼれ落ちた。

彼女が4年前朝鮮を訪問した際、主席は自ら空港まで出向いて手厚く迎えた。

主席は盛大な歓迎宴を催し、自ら演説を行い、彼女とともに咸興へ行って興南(フンナム)肥料連合企業所に建てられた周恩来総理の銅像と記念碑の除幕式にも臨席した。

その時、鄧穎超はもっとも近しい革命同志であり戦友である周恩来の姿を再び見ることができた喜びと感激にひたり、主席に重ね重ね心から感謝の意を表した。

金正日総書記はこみあげる感激にひたっている鄧穎超に、周恩来同志は偉大な革命家であると述べ、彼が朝中友好のために多大な功績を残したことを熱く回顧した。

「朝鮮人民の偉大な領袖であり中国人民の親しい友である金日成同志が、周恩来同志と結んだ厚い親交を忘れず、わたしに深い関心を寄せてくれていることに対し非常にうれしく思います。わたしは金正日同志が今しがた述べられた言葉を永遠に忘れないでしょう」

鄧穎超の頬は涙にぬれた。

何と感動的な光景であったか、中国側の通訳は涙にむせんで満足に通訳することができず、朝鮮側の通訳が通訳しなければならなかった。

やがて別れる時間になった。

鄧穎超は総書記が重ねて遠慮したにもかかわらず、家まで訪ね

て来たもっとも大切なお客を戸口で見送ることはできないと言って庭先まで出て来た。
　別れ際、鄧穎超は総書記の手を強く握り切々と述べた。
　「金正日同志がわたしの家に来られたことはもっとも慶賀に堪えないことです。これからもたびたびおいでください」
　総書記の車が見えなくなるまで、彼女は手を振り、その場に立ちつくしていた。

ヤゾフの驚嘆

　旧ソ連の国防相だったヤゾフ、彼は「軍事百科辞典」と呼ばれた博識な人だった。
　いつかヤゾフは米国防長官だったカルシーと会って言葉を交わし、相手をびっくりさせたことがあった。
　その中でアメリカの南北戦争が話題になった時、彼はどの戦闘はどのように展開され、どの将軍はどんな役割を果たし、交戦双方の戦術的長所と弱点は何であったかを詳しく分析した。カルシーはアメリカの国防長官である自分よりソ連国防相のヤゾフの方が南北戦争についてより詳しく知っていることに大きな衝撃を受け、あなたは軍事百科辞典だと感嘆した。
　ヤゾフは人々が自分を指して「軍事百科辞典」と呼ぶことに対して誇りと思い、それとなく自負していた。
　そのうち1998年7月某日、朝鮮を訪問した彼は金正日総書記の

接見を受けた。

自ら宿所を訪ねた総書記はヤゾフにやさしく声をかけた。

「ようこそいらっしゃいました。ご機嫌はいかがですか」

「尊敬する金正日同志、本当にお会いしたかったです。わたしは金正日同志の愛情と配慮によってこのように健康です」

総書記は明るく笑ってヤゾフと記念写真を撮った後、面談室に向かった。

ヤゾフとの会見は5時間近く続いたが、その大部分は軍事に関する事柄であった。

ヤゾフは終始一貫総書記の該博な知識に驚嘆せずにはいられなかった。

総書記はある一つの軍種や兵種だけでなく、陸海空軍のすべての兵種について、現代軍事科学の最先端技術と装備について完全無欠に把握しているだけでなく、現代戦の戦略戦術と細かな戦闘組織法に至るまで、軍事の各分野に通暁していた。

総書記の軍事的英知と天才的卓見にヤゾフはすっかり気を呑まれ、また魅惑された。

ヤゾフは感動のあまり、総書記にこう言った。

「わたしはきょういま一つの軍事アカデミーを卒業したようなものです。尊敬する金正日同志の幅広い軍事的見識と該博な知識には完全に両手を挙げました。尊敬する金正日同志は政治の大家であるばかりか軍事においても傑出した大家です。わたしは尊敬する金正日同志の弟子になります」

金大中の吐露

2000年6月15日、歴史的な北南首脳対面を終えて帰途についた金大中はいつまでも感激が消えなかった。

往路と同じように、金正日総書記が同乗して温かく見送ってくれるからであった。

車内で総書記はこういうことを言った。

── 今回われわれは対面して歴史的な北南共同宣言を発表し、国の統一のために大きく一歩を踏み出した。金大統領はかつての野党人士から今日は大統領になり、南朝鮮の歴代のどの執権者が考えも及ばなかった大事を成し遂げて感慨深いはずだ。そういう意味で一個人の人生史の見地からしても金大統領の人生は成功した人生だと言える……

金大中は言った。

「そうです。わたしがこのたび来て、金正日国防委員長にお会いできたことは、わたしの人生史のこのうえない幸運だと思います。わたしは晩年をはなやかに飾った訳です。わたしはこれ以上望むことはありません」

事実、波瀾に満ちた彼の人生行路において、平壌で過ごした2泊3日は一瞬にすぎない。その一瞬が彼の一生を見事に飾ってくれた。金正日総書記が彼の一生を飾ってくれたのである。

北南共同宣言の署名式を終えた後、金大中は宿所に随員全員を集めて心情を吐露した。

── 金正日国防委員長は実に偉大な人であり、人間的に心から好感のもてる人であり、一緒に仕事をしたくなる信頼するに足る人だ。金正日国防委員長は今も偉大であるが、展望はさらに輝かしい人だ。あれほど情熱的で気迫にあふれる人を見ると北の前途はもちろん、民族の明るい未来を確信することができる ──

平壌訪問を終えて帰途につく時、金大中は金正日総書記に自分の真情をこう吐露した。

「わたしは政治経綸も取るに足らぬものであり、年を取っているうえに大統領の任期も2年8カ月残っているだけです。ですから将来のことは全面的に国防委員長殿にかかっています。国防委員長殿が同胞の運命に思いをいたして、どうか万事よろしく処理してください」

曲折に満ちた老政客のいつわりのない真情であった。

オルブライトのブローチ

2000年10月下旬、米国務長官オルブライトが200余人の随員を従えて平壌を訪問した。

「唯一超大国」というアメリカの国務長官が朝米関係史上初めて朝鮮を訪問するということ一つによっても世界を驚かすには十分であった。

ところが、彼女の挙動に焦点をおいて注視していた世界は時間が経つにつれいっそう大きな驚きにとらわれた。それは何回とな

く変わるオルブライトのブローチを通じて見たその心理の変化があまりにも予想を越えるものであったからである。

到着当日、オルブライトの胸には星条旗のブローチがつけられていた。

外交においてある種の「奇妙な政治的メッセージ」をさまざまなブローチで表現して相手を調整する特技をもっているというオルブライトにとって、星条旗のブローチはアメリカの「威厳」を象徴するものだった。

翌日、金正日総書記はオルブライトと談話を交わした。

総書記は朝米関係をはじめ複雑かつ先鋭な国際問題、アジア太平洋地域と朝鮮半島の情勢、アメリカが憂慮しているというミサイル問題など、彼女が関心をもっているすべての問題に即座に明快な回答と結論を与えた。

オルブライトの口からは公式の席であることも忘れておのずと感服の声がもれた。

「委員長があまりにもストレートに答えてくれるので、とても魅惑されます」

外交辞令ではない真情の吐露であった。

その表示として、オルブライトは総書記のために設けた宴会の際、ハートのブローチをつけて出て来た。ハートのブローチは相手に対する限りない尊敬と欽慕を意味するという。

オルブライトの随員のうちの一人である朝鮮半島平和会談専任特使カトマンは「今回オルブライトは平壌訪問の結果に対して非常に満足している。特に金正日委員長にすっかり惚れた」と

語った。

オルブライトは帰国後、クリントンに提出した報告書に次のように書いた。

「……金正日委員長は今までわれわれが考えていたようなタイプの人物とは全然違う。理論が理路整然として非常に論理的であり、複雑な現今の国際問題をすっかり見抜いているだけでなく、それに対する分析と判断は正確であり、諸般の問題処理において大胆かつおおようで明晰である。相手の発言をごく慎重に注意深く最後まで聞き、雅量に富んでいるので対話に面白味があり、対話の途中でおのずと金正日委員長の理論と主張に深く引き込まれるのをどうすることもできない。……総じて金正日委員長は政治、経済、文化、軍事、外交など広範なすべての問題において理論が明白で自信に満ち、おおようで周到緻密なきわめて博学多才な指導者であることを認めざるを得ない」

平壌での短い滞在期間に14時間も総書記と対談し、空港を発とうとするオルブライトの胸には、平和を象徴するという牧童のブローチが飾られていた。

プーチンの贈り物

2003年2月、朝鮮駐在ロシア大使館では金正日総書記を迎えて、プーチン・ロシア連邦大統領からの祝電と贈り物を伝達する儀式が行われた。

贈り物はオルロフ種の雄馬3頭であった。

その馬はロシアの特産であり、賢く勇猛かつ剛力で世界的にもっとも優れた競馬用の馬の一種として公認されていた。ロシアではこの馬が他の国に広がらないように厳しく統制していた。

にもかかわらず、ロシア大統領はなぜ総書記だけに例外の好意を施したのだろうか。

朝鮮が核拡散防止条約から脱退する措置を取ることで世界の耳目が平壌に注がれていたその年の1月中旬、ロシアは核問題を討議するため外務省の次官を大統領特使として朝鮮に派遣すると提起してきた。

金正日総書記はこれを承諾し、特使一行に接見した。

総書記は会見の席で、朝鮮半島における核問題の本質とそれに関する朝鮮の原則的で一貫した立場、そして問題解決の方法について明白に説明して、ロシアに正しく認識させた。

半生外交活動に従事してきた特使は、総書記の意味深長な話を聞き、総書記の千里眼の英知と非凡な知略、鉄の意志と胆力に驚嘆を惜しまなかった。

帰国後、特使は総書記の言葉どおりに大統領に伝えた。

すでに平壌とモスクワ、そしてウラジオストックでの対面を通じて総書記の風格に接していたプーチンは、誕生日を迎える総書記に祝電とともに大事なオルロフ種の馬を贈呈することにしたのである。

贈り物を伝達する儀式で大使は、ロシアでは白馬に乗るのは凱旋将軍だとし、プーチン大統領がオルロフ種の白馬を贈呈するの

は、金正日最高司令官が何事においても勝利と成果を収めることを願う心がこもっている、と述べた。

馬を護送してきたメンバーは、自分たちが大統領の命令に従いロシア特産のオルロフ原種の中からもっとも優れ、新しい環境に慣れやすい歳の馬を選ぶのに苦心し、選んだ馬を真心こめて管理したことを伝えた。そして半生馬の管理に当たってきた自分たちだが、今回のような栄誉ある命令を受けて遂行したのは初めてだと興奮して語っていた。

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国
ㄱ－2835007

E-mail：flph@star-co.net.kp
http：//www.naenara.com.kp

朝鮮・平壌
チュチェ101（2012）

ISBN 978-9 946-0-0904-9
9 789946 009049